

【史料訳】

ア ノ ー の 歌

北島 寛之 訳・註解

解題

ここに訳出を試みるのは、初期中世高地ドイツ語の歴史叙事詩『アノーの歌』(Das Arnolied)である。この詩は一〇八〇年頃ケルン近郊のジークブルクの修道士(作者不詳)により、^①ドイツ国王ハインリヒ四世の摂政を務めたケルン大司教アノー二世(在任一〇五六―七五年)を聖人として讃美する目的でつくられたといわれるが、しかしこの詩は単なる聖人伝ではない。アノーの聖人としての事績のみならず、歴史を始源の時点にまで遡行させて、天地創造からアノーの時代へと至る救済史(Heilsgeschichte)と世界史(Weltgeschichte)の二つの歴史が展開され、その歴史の中にアノーが位置づけられている点に、この詩の大きな特色が見られるのである。さらに、その壮大な構図の中に「ドイツ人」の歴史が組み込まれ、彼らの歴史的役割が独自の方法で展開されている点に、この詩のもう一つの大きな特色があるといえるよう。

このように、『アノーの歌』は聖人伝と救済史および世界史を結合させた特異な性格の詩であるとともに、中世における最初の「ドイツ史」としても重要な意味を有している。^②さらにこの詩は、ケルンを中心とするライン地方のこの時期における歴史意識の高揚と発展を物語る史料としても貴重なものと考えられる。本稿で『アノーの歌』を翻訳した意図もこうした点にある。

以下では『アノーの歌』の理解を深めるための予備的考察として、『アノーの歌』の成立をめぐる時代的・社会的背景や内容に関する補足的説明を行ないたいと思う。

『アノーの歌』の成立背景

はじめに、この詩の中心人物たるケルン大司教アノーについてその事績を述べてみよう。^③アノーは一〇一〇年頃シュヴァーベン^④の貴族の家門に生まれた。その後、バンベルクで学び、同地の司教座聖堂付属学校の指導者となったアノーは、皇帝ハインリヒ三世(在位一〇三九―五六)の信頼を得て一〇五四年にゴスラーの首席司祭となり、一〇五六年にはケルン大司教に任命された。ケルン大司教となったアノーは皇帝に請われて国政にも参与し、ハインリヒ三世の死後、皇后アグネスの下で影響力を強めていった。そして一〇六二年、皇后による摂政政治の限界がもはや自明のものとなった時、アノーは皇后に対してクーデターを起こし、皇后に代わって自ら幼少のハインリヒ四世(在位一〇五六―一一〇六年)の後見役につくに至った。この時から一〇六四年にハンブルクブレーム大司教アーダルベルトにその地位をとって代わられるまで、アノーの摂政政治の時代が続いた。この時代にアノーはとりわけ、教皇選出をめぐる生じた教会分裂の調停に尽力し、帝国と教会の関係回復に努めたとされている。一〇六四年以降は次第に国政から退き、ケルン大司教座での司牧活動に重点が置かれるようになり、多くの修道院を建設・改革し、大司教座の発展を促進した。その一方で都市ケルンとの関係は、都市の経済的發展によって有力商人層の影響力が強まる中で、次第に対立の様相を帯びていき、ついに一〇七四年には有力商人層を中心とする一部の市民がアノーに対して暴動を起こし、彼を都市から追放するに至った。これに對して、アノーは大军を率いて市民の反乱を鎮圧し、都市に壊滅的打

撃を与えたという^⑥。翌七五年に都市と和解したアノーは、ケルン近郊に自らが建設したジークブルク修道院に隠遁し、同年その地で没した。死後ほどなくアノーの墓前において数多くの奇蹟が見られ、多数の巡礼者がこの地を訪れたといわれる。そして死後一世紀を経た一一八三年、アノーは聖人に列聖された^⑦。

以上の如きアノーの事績に関しては、すでに幾つかの同時代の証言が存在するが、それらの多くはアノーに対して批判的である。それらの批判によれば、アノーは貪欲で権力志向が強く傲慢な人物であり、皇后に対して謀反を企て不正なやり方で摂政の地位につき、国王に対しても忠誠を尽くすことなき背徳者であったとされる^⑧。また、ケルン近郊の修道院を自らの支配下に服属させてその所領を不当に占拠し、修道院の権利を侵害したと非難されている^⑨。都市ケルンの反乱鎮圧に對しても、アノーがとった苛烈な報復措置に批判の目が向けられている^⑩。このような批判に対して、アノーの亡骸が眠るジークブルクの修道院はアノーの功績を称えて彼を聖人として称揚し、その崇敬を広めることで対抗しようとした。すでに一〇七八年頃にはアノーに関する最初の聖人伝がつくられ、それによりアノーは敬虔な大司教の模範として理想化された。さらにこの聖人伝を通じてアノーの墓前における数々の奇蹟が喧伝されることにより、聖人崇敬の拡大がはかられた。このような状況の中、同様の目的から『アノーの歌』もつくられたと考えられるが、この詩の成立の背景にはさらに当時の政治状況が大きく関係していたものと思われる。

当時、ドイツの諸教会はオットー一世（在位九三六―七三年）以来のいわゆる「帝国教会政策 (Reichskirchenpolitik)」によって国家の統

治機構の中に組み込まれており、国王の直接の保護・支配下に置かれた大司教や司教は帝国司教 (Reichsbischof) として、宗教的活動にとどまらず、国家行政の要職を担い、王権の重要な政治的支柱となっていた^⑪。このような帝国司教の職務の二重性は、教会と国家が一つに結びついている限りにおいて同一の次元に属するものであり、それ自体が問題とされることもなかった。しかし、十一世紀後半に聖職叙任権をめぐるドイツ国王Ⅱ皇帝と教皇の間で起こった叙任権闘争を通じて、教皇および反皇帝派の諸侯らにより帝国教会制が批判にさらされる中で、聖俗両権を司る帝国司教のあり方も問われるようになったのである。これら帝国司教の中でも、とりわけアノーは中心的人物とみなされていたため、帝国司教としてのアノーの行為を正当づける必要が生じていた。ここに『アノーの歌』が書かれることになったもう一つの成立契機が求められるであろう。そしてその際、ロートリンゲン地域におけるラテン語の歴史叙述の伝統が作品成立に大きな影響を与えたものと思われる。

ライン・ムーズ河間に位置するロートリンゲン地域は、十一世紀初頭以来、西欧における歴史叙述の中心地として重要な役割を果たし、数多くの歴史叙述を生み出していた^⑫。この地域ではとりわけ多様なジャンル（例えば年代記、民族史、司教座史、聖人伝、伝記など）の諸要素を包含した地方史叙述 (Lokalgeschichtsschreibung) が発展を遂げ、さらにそれらの地方史叙述を普遍的な救済史・世界史の中に位置づけようとする試みがいち早く現れていた。例えば、九八〇年頃に書かれたロブ（ラウバッハ）修道院長フォルクインの『ロブ修道院長事績録』では、四世界帝国論に基づく世界史にフランク人の民族史が

結びつけられ、さらにそこにロブ修道院の歴史が組み合わせられている。またフォルクインの後任の修道院長ヘリガーによる『リエージュ司教事績録』（十世紀末）では、救済史と世界史の枠組みの中にリエージュ司教座の歴史と聖人伝（聖レマクルス伝）が位置づけられている。さらに十一世紀半ば頃につくられた『カンブレー司教事績録』においては、都市および司教座の歴史と司教ジェラルルの伝記が救済史と結びつけられて描かれた。¹⁵

このような歴史叙述のスタイルは、その後十一世紀末から十二世紀初めにかけてつくられたフラヴィニのユーグの『年代記』と『トリリア人の事績録』において頂点に達し、普遍的な世界史と年代記および聖人伝とを組み合わせた司教座史の典型的な叙述形式となった。¹⁶これらの作品はいずれも救済史や世界史などの普遍史の中に司教座の歴史や聖人の事績を組み入れることによって、自らの教会・修道院の権利や地位を歴史的に基礎づけ、その重要性を高めようとしたのであるが、『アノーの歌』の作者もまた帝国司教としてのアノーの地位を正当づけるために、このような歴史叙述の形式を採り入れたものと思われる。その意味では、『アノーの歌』の構成は必ずしも特殊なものではなく、ロートリンゲン地域の歴史叙述の伝統に基づくものであったといえるのだが、しかしこのことは『アノーの歌』の意義を何ら低めるものではない。それらの歴史叙述の影響を受けながらも、『アノーの歌』の作者は、様々なジャンルの要素を組み替えてそこに新たな着想を組み込むことにより、それまでに存在した如何なる歴史叙述とも異なる独自の作品をつくりあげたのである。その特色について知るために、次に『アノーの歌』の構成と内容について見ていこう。

『アノーの歌』の構成と内容

『アノーの歌』は全体として八七八行四九節から成り、大きく分けて三部構成のかたちをとっている。第一部はプロローグを含む七節（一二〇行目）から成り、救済史の簡潔な概観である。天地創造（二節）に始まり、人類の墮落（三節）、キリストの出現と人類の罪の贖い（四節）、使徒伝道（五節）、そしてアノーに至るまでのケルンの聖人と都市の歴史（六―七節）が語られる。この詩の中核をなす第二部は八―三三節（二二―五七六行目）より構成され、世界史の叙述に充てられる。そこでは人類の歴史が四つの世界帝国の変遷を通して描かれ、さらに「ドイツ人」の歴史もこの中に組み込まれて叙述される。最後の第三部は三四―四九節（五七七―八七八行目）であり、聖人としてのアノーの事績と死後の奇蹟が記される。

第一部の救済史において中心をなすのは、天地創造（二節）について触れた次のような叙述である。「神は被造物を完全に二つの部分に分けられた。一つはこの世界であり、他の一つは霊的なものである。…神の賢明さと熟練とにより、両者から一つの被造物、すなわち人間が創られた。人間は肉体と精神の双方を有するがゆえ、天使に最も近き所に立つのである」。それゆえ「我々は人間を第三の世界 (*tertium veridile*) とみなすべきである」。アウグスティヌス以来の伝統的な世界観によれば、世界は天と地、神の国と地上の国の二つから成り、両者の対立関係の中で人類の歴史が展開するとされてきたが、こうした二元論的な世界観に対して、ここでは神によって創られた二つの世界を調和的に結合する「第三の世界」という新たな空間が提示され、そ

れを人間の世界として位置づけることにより、それまでとは異なり人間世界それ自体に積極的な意味が付与されているのである。このような考え方は古代ギリシアの「小宇宙（ミクロコスモス）」に関する思想的伝統に基づくものであり、九世紀にヨハネス・スコトゥス・エリウゲナを通じて西欧世界に受け継がれたとされるが、『アノーの歌』の作者はおそらくヨハネスの思想的影響を受けていたものと思われる。このような考えはこの詩全体にも及んでおり、救済史と世界史は「第三の世界」の象徴たるアノーにおいて収斂し、聖と俗（教会と国家、宗教と政治、大司教と帝国摂政）の関係はアノーにより模範的に体现されることとなる。

天地創造の叙述に続き、『アノーの歌』では救済史叙述の伝統に従いながら、アダムの原罪から十二使徒によるキリスト教伝道の物語が述べられる。そして使徒伝道に連結するかたちで、都市ケルンが救済史の枠組みの中に組み込まれるのである。その際、都市ケルンには聖なる都市としての性格が付与され、ケルンの多数の聖人を通じてこの都市の救済史における意義が強調される。そしてこれら多数の聖人の中にアノーの名が加えられ、アノーと都市ケルンの相互的な結びつきを通じて、アノーは救済史の中に位置づけられ、ここに救済史の叙述が締め括られるのである。

第二部の世界史は、アッシリア帝国の伝説的建国者ニヌスのアジア征服と最初の都市ニネベの建設、そして彼の妻セミラミスによるバビロン建都の物語（八―一〇節）から始められる。それに続いて、「ダニエル書」のいわゆる「四世界帝国論」に基づき、世界帝国の変遷が語られていく（一一―一七節）。

旧約聖書の「ダニエル書」二章によれば、カルデア王ネブカドネザルは、金銀など四種の素材から作られた巨像が岩石により破壊される夢を見たが、預言者ダニエルがその意味を説き明かし、相次いで興った四王国が最後に神の国によって支配されることを予告しているとした。同じく「ダニエル書」七章では、ダニエルの夢に現れた四つの獣（獅子、熊、豹、十本の角を持つ獣）が四王国に例えられ、第四の王国が滅亡した後に永遠の国が到来するという物語が述べられている。これらの記述を基礎にして、カルデア（バビロニア）に始まり、メディア、ペルシア、マケドニアへと続く「四世界帝国論」の図式が形成された。「四世界帝国論」の伝統はその後古代ローマにも受け継がれたが、そこでは四世界帝国の構成が変化し、アッシリア（もしくはバビロニア）、ペルシア、マケドニア、ローマと解釈されるに至った。この解釈はエウセビオスを経て、ヒエロニムスにより規範化され、アウグスティヌスに継承された。そしてこの「四世界帝国論」は「六世界年代」とともに中世の世界史叙述における基本的図式となっていくのであるが、しかしこのことは「四世界帝国論」の伝統が連綿として中世に引き継がれたことを意味するものではない。A・D・ファン・デン・ブリンケンによれば、六世紀以降「四世界帝国論」は歴史叙述から殆ど姿を消してしまい、それが再び現れるのはようやく十一世紀末になつてからのこととされる。^②これら十一世紀後半に現れた「四世界帝国論」に関する歴史叙述の中で、『アノーの歌』は最も初期のものとして重要な位置を占めるが、内容的にもヒエロニムスを最も忠実に継承した作品として注目すべきものがある。

『アノーの歌』と同時代に書かれ、世界帝国の変遷について記した

歴史叙述としては、ザンクト・ブラジエンのベルノルトの『年代記』とミヒェルスベルクのフルトルフの『年代記』を挙げることができるが、ここでは四帝国の名前について言及が見られる程度で、具体的な内容については殆ど触れられていない。²¹⁾これに対して『アノーの歌』ではダニエルの見た夢の内容が詳しく述べられており、四つの獣の描写や反キリストの出現の記述などにヒエロニムスの『ダニエル書註解』(四〇七年頃)の影響を見てとることができる。²²⁾このように『アノーの歌』はアウグスティヌス以後、最初にヒエロニムスの『四世界帝国論』を継承した作品とみなすことができるのであるが、しかしヒエロニムスの影響を受けつつも、四帝国の解釈において『アノーの歌』は大きな相違を見せている。ヒエロニムスのものでは、ダニエルの夢に現れた四つの獣は「四帝国の野蛮さと残忍さ」の象徴としてネガティヴに描かれるのに対して、『アノーの歌』では四帝国に肯定的な捉え方がなされているのである。とりわけ第四の帝国＝ローマ帝国に対する捉え方は対照的であり、ヒエロニムスが第四の帝国を「詩篇」八〇章一三節に現れる主のぶどう園を食い荒らす獐狂な猪に例えて、その食欲さと残忍さを強調するのに対して、『アノーの歌』ではそうしたネガティヴな性質は影を潜め、それに代わって「自由」と征服されえぬ強大さが前面に現れる。そしてそれにより全世界を服従させたローマ帝国は世界帝国発展のピークに位置づけられ、これに続く一八節以下ではそのローマ帝国の歴史が語られていくのである。

ローマ史は共和政の時代から説き起こされ、一八節では元老院の統治とカエサル(「ドイツの諸地方(dutsche land)」への派遣について述べられる。それに続く一九―二三節では、ドイツの四つの民族

(シュヴァーベン人、バイエルン人、ザクセン人、フランク人)の「起源説話(origo gentis)」と戦闘の経過が語られる。それによれば、シュヴァーベン人は海外に起源をもち、バイエルン人、ザクセン人、フランク人はそれぞれアルメニア、アレクサンドロス大王の従士(＝マケドニア)、トロイアに起源を有するとされる(特にフランク人に關しては、ローマ人と共通の祖先をもつことが強調される)。このうちフランク人とザクセン人に關しては、古い伝承(フレデガール『年代記』(七世紀)、コルヴァイのヴィドゥキンント『ザクセン史』(十世紀)など)にその起源が遡るのに対して、シュヴァーベン人とバイエルン人の起源については、『アノーの歌』が初出の史料をなしている。E・ネルマンによれば、この二つの民族の起源は『アノーの歌』の作者の創造によるものではなく、おそらく当時すでに存在していた伝承に基づくものであるとされる。²³⁾なお、これらドイツの四民族はそれぞれ四帝国(バビロニア、ペルシア、マケドニア、ローマ)と対応關係にあると考えられる。カエサルはこれら四民族を十年以上かけて平定し、ローマへ凱旋した。しかしローマ人は彼を歓迎しようとしなかったため、カエサルは「ドイツの地」へ戻って人々に支援を求め、彼らの協力によって敵を下し、帝国全土を手に入れて帝政をしいた。それ以来、「ドイツの人々(dutsche man)」はローマにおいて愛され重んじられた」という(二四―二八節)。

以上の如き歴史はもとより史実ではなく、『アノーの歌』の作者が創り上げたフィクションである。しかし、この一八―二八節の叙述は中世における最初の「ドイツ人」の歴史であり、H・トーマスに注目されて以来、中世史研究において今日大きな関心が寄せられている。²⁷⁾こ

の箇所においてとりわけ注目すべきは、「ドイツ人」の歴史的役割が全く独自の方法で展開されている点である。すなわち、「ドイツ人」を構成する四民族の起源を四帝国と結びつけることによって四民族が世界史の中に位置づけられるとともに、これら四民族がカエサルとの同盟関係のうちに「ドイツ人」として一つになり、ローマ帝国の歴史の中に組み込まれるに至ったとされるのである。ローマ帝国の継承の問題に関しては、すでに九、十世紀に「帝権移転論 (translatio imperii)」——すなわち、カール大帝（あるいはオットー一世）の皇帝戴冠により帝権がローマからフランク人（あるいはドイツ王権）に継承されるという考え——が存在していたが、『アノーの歌』ではすでにカエサルのもとで「ドイツ人」はローマ帝国の構成要素となつたとされており、ここでは帝権移転論は不要のものとなっている。

「ドイツの諸地方」の重要性は、この地における都市建設に反映される（二九—三〇節）。すでにカエサルの時代にローマ人によってヴォルムス、シュパイヤー、マインツ、メッツ、トリアーなどの都市が建設されていたが、さらにカエサルの後継者アウグストゥスのもとでアウクスブルクやケルンが加わるようになった。これらの都市の中でもとりわけケルンは最も重要かつ強力な都市として描かれている。²⁹

さらに、このアウグストゥスの時代にはイエス・キリストが生まれ、それとともに「新しい王国 (ein niuwe kuninriche)」が到来する（三一節）。この「新しい王国」の到来は第四の帝国（ローマ帝国の終焉を意味するものではなく、両者は併存しながら展開していくのである。³⁰）ここにそれまでそれぞれ別個に扱われてきた救済史と世界史が邂逅することとなり、そこから再びキリスト教伝道に目が向けられて、ア

ノーへと至るケルン教会の歴史が述べられる（三十一—三三節）。こうしたアノーは世界史の中に位置づけられ、世界史の叙述が終えられる。

ところで、この三三節ではアノーは第三十三代のケルン司教にして、ケルンの七人目の聖人とされているが、この七と三十三という数は『アノーの歌』の構成において重要な意味をもっている。すなわち、救済史と世界史はそれぞれ七節、三三節で終わり、そのいずれにおいてもアノーに重要な役割が与えられているのである。このように数を象徴的に用いることにより、『アノーの歌』の作者は、救済史と世界史がアノーへと向かって展開することを特徴づけようとしたものと思われる。³¹

救済史と世界史に続く第三部では、ケルン大司教・帝国摂政としてのアノーの聖俗両面にわたる活動が描かれ、アノーは聖俗を司る模範的司教として位置づけられる（三四—三七節）。先ず、宗教的活動においてはアノーの敬虔さと慈悲深さが強調される。ここではアノーが祈りによって夜を過ごし、貧しき人々、とりわけ寡婦と孤児のために世話したことがとりあげられ（三六節）、また神への愛を人々に促すために、至る所で教会を飾り立て、五つの修道院を建堂したと述べられる（三七節）。

一方、帝国政治においてアノーの権力はすべての諸侯を凌駕するほどに強大であり（三四節）、ハインリヒ四世の摂政として帝国に繁栄をもたらし、彼の名声は諸国に及んだとされる（三七節）。このような幸福な時代に対置されるのが、ハインリヒ四世の単独統治の時代であり（四〇節）、この時代に起こったザクセン戦争（一〇七三—一〇七五年）を念頭に置きつつ、ハインリヒ四世のもとで帝国の秩序が乱れ、殺人、

略奪、放火などにより教会と国土が荒廢に帰したことを嘆いている。もとより、アノーのもとで争いがなかったわけではない。三九節では世俗諸侯との対立と都市ケルンの反乱について言及されているが、しかしそれによってアノーが非難されることはなく、むしろこれらは神の試練として説明され(三八節)、アノーはそれらの困難に耐えることにより、天において神から報いを受けたとされるのである。

このようにアノーの聖俗にわたる活動が述べられ、模範的な司教として称えられた後、四一節以下では聖人としてのアノーに目が向けられ、神の啓示とアノーの幻視(四一―四三節)、アノーの死(四四節)、そして死後の奇蹟(四五―四九節)が語られながら、物語は幕を閉じる。

以上のように、救済史と世界史と聖人伝の三つの要素を融合させて、一貫した世界像をつくり上げた『アノーの歌』は、その構成力において同時代の歴史叙述の中でも一際群を抜くものであり、また世界史における「ドイツ人」の役割に関する叙述や「第三の世界」の構図は、この当時に例を見ない新たな着想である。さらに、「四世界帝国論」や都市讃歌に関する叙述は、十二世紀以降の歴史叙述の先駆けをなすものとして位置づけることができるであろう。これらの点において、『アノーの歌』は重要な意義を有しているのである。⁽³²⁾

テキストについて

最後に、テキストについて幾つかの点を付言しておく。『アノーの歌』の原本および写本は今日現存しないが、十七世紀前半には少なくとも二つの写本が存在していたと考えられる。このうちの一つをM・

オーピッツが編纂し、一六三九年に印刷・刊行した。⁽³³⁾ 今日出版されている『アノーの歌』のテキストはすべてこのオーピッツの版に基づいている。もう一つの写本については、すでにオーピッツ以前にボナベントウラ・フルカヌスがこれを編纂・出版しているが、そこではプロローグ(一節)が欠落しており、また二節の二五行目以下でオーピッツ版には見られぬ記述が付け加わっている。⁽³⁴⁾ かつてはオーピッツの版とフルカヌスの版は同一の写本に基づくものとみなされていたが、今日では両版はそれぞれ異なる写本から転写したものと考えられている。⁽³⁵⁾

オーピッツのテキストは一九世紀末以降校訂が加えられ、M・レーディガー(一八九五年)をはじめとして、K・マイセン(一九四六年)、F・マウラー(一九六五年)、E・ネルマン(一九七五年、一九九九年に第五版刊行)らによってテキストが出版された。翻訳の底本にはネルマンのテキスト(*Das Annolied*, Stuttgart 1999)を用い、同テキストのドイツ語対訳を逐次参照した。併せて *Frühe deutsche Literatur und lateinische Literatur in Deutschland 800-1150*, W.Haack / B.K.Vollmann (Hg.), Frankfurt am Main 1991 所収のテキストおよびドイツ語対訳を参照した。なお、原文は詩形をとっているが、翻訳にあたっては散文文体で訳すこととした。註はすべて訳註である。

『アノーの歌』

1

【一一八行目】

我々は古の出来事に関する歌を幾度も耳にしてきた。⁽¹⁾ 猛き勇士たちが如何に戦い、彼らが強固な都市を如何に攻め落し、如何にして友情が終わりを迎え、強大な国王らが如何にして滅びたのかを。今や思い

を巡らす時である、我々自身が如何にして終わりを迎えるのかを。我々が主なるキリストは数多の奇蹟を我々の目の前で行われた。主はジークブルクにて卓越した人物、聖なる司教アノーを通じて、彼のために奇蹟を行われたのである。我々は我々自身のために配慮せねばならぬ。何故なら、我々はいつしか去りゆく身なのだから。この悲しみに満ちた人生から永遠に我々があり続ける天の国へと。⁽²⁾

2

「一九—三八行目」

世の始めには光と言葉があり、⁽³⁾神聖な神の御手により様々の見事な被造物が創られた。神はこれらの被造物を完全に二つの部分に分けられた。一つはこの世界であり、他の一つは霊的なものである。⁽⁴⁾「そこから二つの世界が存在していることが理解できよう。すなわち、一つは我々が存在する世界であり、もう一つは霊的な世界である。」⁽⁵⁾神の賢明さと熟練により、両者から一つの被造物、すなわち人間が創られた。人間は肉体と精神の双方を有するがゆえ、天使に最も近き所に立つのである。⁽⁶⁾福音書の説く如く、すべての被造物は人間のうちにある。⁽⁷⁾ギリシア人が述べているように、我々は人間を第三の世界とみなすべきである。かかる栄誉からアダムが創造されたのだが、彼は自制心を保つことができなかった。

3

「三九—六〇行目」

ルシファーが悪魔に転じ、⁽⁸⁾アダムが神の言葉を破った時、神は激しく怒られた。他の被造物が正しき秩序を守るのを見られただけに尚更に。月と太陽は喜びのうちに光をもたらし、星々は己が星辰のうちに

留まりて暑氣と寒氣を作り出す。火は上方へと舞い上がり、雷鳴と風は流動する。雲は豪雨をもたらし、水は下流へ流れてゆく。大地は花で飾られ、森は葉で覆われる。野の獣は自らの道を保ち、鳥は素晴らしき歌を奏でる。神が始めに与えた定めをすべての被造物が守っていた、⁽⁹⁾二つの被造物を除いては。⁽¹⁰⁾神は彼らを最高のものとして創造されたが、彼らは思い上がって高慢になってしまった。それゆえ苦しみが生まれたのである。

4

「六一—七四行目」

如何にして悪魔が人間を誘惑したか、其は周知のところである。悪魔は人間を自らの僕にしようと考え、五つの時代を支配した。⁽¹¹⁾地獄に至るまでのすべてにおいて、神が自らの子を送り出されるその時まで。神の子は我々が罪を贖われた。我々のために自ら犠牲となり、死によつて力を得られた。罪もなく冥府へ赴き、これを力でねじ伏せられた。⁽¹²⁾悪魔は力を失い、我々は皆自由の身となった。⁽¹³⁾我々は洗礼によつてキリストの従者となったがゆえに、主を愛さねばならぬのである。

5

「七五—九五行目」

キリストは十字架の御旗を掲げ、十二使徒に諸国へ行くよう命ぜられた。⁽¹⁴⁾異教徒を打倒するために、キリストは天より彼らに力を与えられた。ペテロはローマを征し、学識あるパウロはギリシアを治めた。聖アンデレはパトラスにて、善良なトマスはインドで、マタイはエチオピアで、シモンとユダはベルシアにおいて、また今日ギリシアに眠

る聖ヤコブはエルサレムでそれぞれ働きをなした。ヨハネはエペソにて教化の説教を行なった。彼の墓からは今日なおマナが生ずるが、これは様々な困窮を防ぐものである。^⑮その他多くの殉教者たちは、自らの神聖な血でもってキリストの意志を実現した。このことは至る所で語られるべきである。彼らは殉教の苦しみの後、主の許へ来たのである。今や主は彼らを大いなる栄誉でもって迎え入れる。

6

〔九六一—一〇八行目〕

トロイア起源のフランク人は、^⑯多くの聖人を彼らの許へ遣わした神に対して絶えず感謝せねばならぬ。ケルンがまさにその例である。ここにはキリストへの愛のために殺害された聖マウリティウスの大軍と一万一千の乙女達が眠っている。^⑰さらに奇蹟を行ないし数多の聖なる司教らも眠っている。^⑱これは聖アノーをして周知のところである。それゆえ我々は讃美の歌にてキリストを誉め称える。

7

〔二〇九—二二〇行目〕

アノーはケルンにおいて司教に叙された。それゆえ都市は常に神を愛すべきである。かつてドイツの地に興った都市の中で最も素晴らしき都市において、かつてライン地方に來たりし者の中で最高の者が支配者となった。都市は益々素晴らしくなった、これほどに賢明なる支配者が都市を導いたのだから。そして彼の卓越ぶりも一層光り輝いた、これほどに素晴らしき都市を治めたのだから。ケルンは最も優れた都市の一つである。聖アノーは都市の名声を不動のものとした。^⑲

8

〔二二二—二三八行目〕

汝らが都市の起源^⑳を辿ろうとするならば、野蛮な異教徒たちのことを耳にしよう。古き都市は彼らによって強大になったのだから。戦争を始めた最初の人間は、ニヌスであったと云われている。^㉑非常に功名心の強かった彼は、盾と槍、頸甲と胸甲を集めて戦備を整えた。さらに銅の兜を集めた。かくて出征が行われた。その時まで人々は傷つけ合うことなく暮らしていた。誰もがそれぞれ自らの土地を有していた。隣人を侵害することなどなかったのだ。彼らは戦に慣れていなかった。そのことがニヌスを大いに喜ばせた。

9

〔二二九—二五三行目〕

ニヌスは彼の民に艱難に耐えることを教えた。敢えて危険に立ち向かうべく、鎧を纏いて騎乗することを教えた。矢を射り戦うことを教えた。アジアの全土を支配下に治めるまで、彼は兵を休ませることがなかった。彼はやがてその地に都市を築いたが、その領域は横幅にして一日の行程、縦の長さにして三日の行程であった。^㉒彼の権力は強大であった。彼は自分の名に因んでその都市をニネベと名付けたが、其は後に大魚がヨナを吐き出した所である。^㉓

10

〔二五三—二七八行目〕

彼にはセミラミスなる名の妻があった。^㉔彼女は古の煉瓦で古代のバビロンを築いた。この煉瓦は巨人らによって焼き尽くされたもの。^㉕偉大なるニムロデ^㉖が愚かにも神への畏敬の念を忘れ去り、地上より天に至るまでの塔を建てることを人々に助言したがため。^㉗神はこれを妨

げ、自らの力により人々を七十の言語に分けられたが、これは今日にまで至る。この煉瓦からセミラミスは正方形の市壁を築いたが、その長さは六十四哩に及んだ。⁽³²⁾ 当時建てられた塔の高さは四千尋に達していた。その後、有名な王たちがこの都市を治めた。其処にはさらに恐るべきカルデア人も居城を構えていた。⁽³⁴⁾ 彼らは諸国を荒らし回り、ついにはエルサレムを焼き尽くしたのであった。⁽³⁵⁾

11

「二七九—一九〇行目」

賢者ダニエルが預言した通りのことがやがて起こった。⁽³⁶⁾ 彼は夢を語り明かしたのだ。彼は見た、この世の四方の風が大海を掻き乱し、海から恐ろしき獣が現れ出るのを。⁽³⁷⁾ 四方の風は四人の天使、彼らは全世界の保護者である。⁽³⁸⁾ 獣は四つの王国、其は世界を完全に包含することとなった。

12

「二九一—一九六行目」

第一の獣は雌獅子で、⁽³⁹⁾ 人間の知性を備えており、バビロンにいるすべての国王の化身であった。その強さと賢明ぶりは、彼らの帝国の名を大いに高めた。

13

「二九七—二〇六行目」

第二の獣は獐猛な熊で、三重の歯を持っていた。⁽⁴⁰⁾ この熊は目にするすべてのものを引き裂き、前足で踏み躪った。三重の歯は三つの王国を意味していた。それらの王国はいずれもキュロスとダレイオスがカルデアを侵攻した時に勢力を拡張した。この二人の強大な王はバビロ

ンを滅ぼした。

14

「二〇七—二四行目」

第三の獣は豹であり、四つの鷲の翼を持っていた。⁽⁴²⁾ この豹はギリシアのアレクサンドロス大王を意味していた。⁽⁴³⁾ 彼は四軍を率いて諸国を遠征し、黄金の柱において世界の果てを認めたのであった。⁽⁴⁴⁾ 彼は荒野を横切りインドへ赴き、そこで二本の樹木と語らった。⁽⁴⁵⁾ さらに二頭のグリフィンとともに大空を駆け巡った。⁽⁴⁶⁾ 彼はまたガラスの容器に入って海の中へと降ろさせたが、不実な家臣らは鎖をつけてこれを海へと投げ捨てた。⁽⁴⁷⁾ 彼らは言った、「そんなに不思議なものが見たければ、これからずっと海底をあちこち回ることだな」。そこで彼が見たものは数多の大魚が泳ぐさま。しかもそれらは人魚であった。これは彼には非常に恐るべきことのように思われた。

15

「二三五—三三六行目」

そこで賢明なるアレクサンドロスは考えた、如何にしてここから逃れることができるかと。潮の流れが彼を陸地へと導いた。彼はガラスを通して数多の不思議なものを見た。そしてついに彼は厳格なる海を怒らせた、幾ばくかの血を流したがゆえに。海は血を感じるや、彼を陸へと投げ出した。かくして帝国へ帰還した彼を、ギリシア人は喜び迎えた。彼は多くの不思議を得ようと求め、世界の三つの部分を手に入れたのであった。⁽⁴⁸⁾

16

「三七—二四八行目」

第四の獣は雄の猪で、これは勇敢なローマ人を表わしていた。獣は鉄の爪を持っていた——誰もそれを捕らえることができなかった——。さらに恐るべき鉄の歯も。これまでかつて飼ひ馴らすことなどできたであろうか。森の猪は比喩的にローマ帝国が自由であることを端的に示している。猪には十の角があり、これで敵を打ち負かした。獣は非常に巨大で、人々に恐怖を催させた。ローマは全世界を服従させたのである。

17

「二四九—二六二行目」

十の角は十人の王、彼らはローマ人と共に戦闘を行なった。十一番目の角は天まで伸びた。星々はこれと戦った。その角にはこれまで見たこともないような眼と口があり、神に対して多くの言葉を語ったがため、直ちにその報復を受けたのであった。この角とは反キリストを意味していた。これはいずれこの世へやって来るが、神が力によって地獄へ送るだろう。すべての夢は天上の天使が解き明かした通りとなった。

18

「二六三—二八〇行目」

ローマ人は黄金の板に、三百人の元老議員の名を記録した。正しき行いと名声を手に入れた彼らは、昼も夜も語り合った、如何にしてローマの権勢を維持すべきかと。すべての貴族が元老議員に従った。彼らは王を持つとしなかったのだから。彼らは高貴な生まれのカエサルを派遣した。その名に因んで、今日国王は皇帝（カイザー）といわれる。彼らは彼に大軍を委ね、ドイツの諸地方と戦うよう命じ

たのであった。その地でカエサルは真に十年以上にわたって力を尽くした。だが非常に勇敢な者たちを服従させることはできなかった。ついに彼らのすべてと和議を結び、こうして彼は支配権を得たのであった。

19

「二八一—二九四行目」

山麓のシュヴァーベン人に対し、カエサルは戦旗を掲げた。彼らの祖先は様々の部族と共にかつて大挙して海を越えてその地へやって来たと云われる。彼らは大軍を率いて、スエヴォの山に自らの天幕を張った。それゆえ彼らはシュヴァーベン人と呼ばれる。議論好きで饒舌なるこの民はしばしばこう言われてきた、戦士は勇敢にして出征を厭わず好戦的であると。しかしながらカエサルは彼らの全軍を滅ぼした。

20

「二九五—三三〇行目」

バイエルンの勇敢な抵抗に対して、カエサルは壮麗なる都市レーゲンスブルクを攻囲した。その地で彼は、兜と胸甲をつけて都市を警護する数多の優れた勇士に目に留めた。彼らはどのような戦士だったのか、それは異教徒の書から明らかである。そこにはこう記されている、ノリクムの剣、つまりバイエルンの剣と。彼らはこれ以上の剣は存在せぬと信じていたのである。その剣はしばしば兜を刺し貫いた。バイエルン人は常に大いなる勇敢さを備えていたのであった。バイエルンの部族はかつて高地アルメニアからこの地へやって来たと云われる。鳩からオリーブの枝を受け取ったノアが箱舟から出てきた場所

から。箱舟の標は今日なおアラト山の上にある。⁽⁶⁵⁾ 遙か彼方のインドにかけて、かの地にはまだドイツ語を話す人々がいると云われる。⁽⁶⁶⁾ バイエルン人は常に好んで戦闘に赴いた。カエサルは彼らに對して勝利を収めたが、そのためには血でもって贖わねばならなかった。

21

「三二—三四六行目」

ザクセン人の氣紛れぶりはカエサルをいたく不快にさせた。カエサルが彼らをすべて征服したと考えた時、ザクセン人は再び彼に反抗した。彼らについては、死に至るまで十二年間世界を支配した傑出せるアレクサンドロス大王の従士であつたと云われている。⁽⁶⁸⁾ 彼がバビロンで亡くなった時、四人の従士が王にならんとして帝国を分割した。⁽⁶⁹⁾ その他の従士らは遠方の地を彷徨し、その一部が船でエルベに下つて来たのであつた。当時この地にはテューリッゲン人が居住しており、彼らは勇敢にザクセン人に抵抗した。当時テューリッゲン人のもとは、長い短刀は一般にザース (saes) と呼ばれていたが、異国の戦士たちはそれらの刀を多数持つていた。平和の目的で協定を取り結んだ会談の際、不実にも彼らはその刀でテューリッゲン人を殺害した。非常に鋭いその短刀に因んで、彼らはザクセンと呼ばれたのであつた。⁽⁷⁰⁾ たとえ彼らがどのように振舞おうとも、彼らは皆ローマ人に奉仕せねばならなかった。

22

「三四七—三七二行目」

さらにカエサルは遠縁にあたる高貴なるフランク人のもとへ向かつた。双方の祖先は古のトロイアに起源を有していたのである。⁽⁷¹⁾ トロイ

アはギリシア人に滅ぼされたが、神が両軍に對してかかる判定を下したのであつた。かくてトロイア人は逃走し、ギリシア人は敢えて帰国しようとはしなかった。トロイアの攻囲が行われた十年の間に、ギリシア人は現地の女性を妻に娶つたからである。彼女たちは夫の命をつけ狙つた。それゆえアガメムノン⁽⁷²⁾は殺害されたのである。他の妻たちも夫を惑わせた。シチリアではキュクロプスがオデュッセウスの仲間たちを食い殺した。⁽⁷³⁾ これに對し、オデュッセウスは槍でもって恐るべき復讐を果たした。キュクロプスが寝ている時にその眼を抉り取つたのだ。キュクロプスの一族は当時シチリアに住みついていた。彼らは松の木ほどの背丈があり、額には一つ目があつた。やがて神は彼らをインドの彼方の森地へと立ち去らせた。⁽⁷⁴⁾

23

「三七三—三九八行目」

トロイア人は住处を求めて世界をさまよい、被征服者のヘレヌスが勇敢なヘクトルの寡婦を妻に娶るまで続いた。⁽⁷⁵⁾ 彼は妻とともに、敵地であるギリシアの国を我がものとした。彼らはその地に新たなトロイアを建設したが、人々はこの都市をその後長らく目にする事ができた。アンテーノルはトロイアが滅亡すると知る以前にすでにこの地を離れ、ティマールウス河畔に都市パドヴァを建設した。⁽⁷⁶⁾ アエネアスはイタリア地方を勝ち取つた。彼が雌豚と三十四の子豚を見つけた場所には、都市アルバが建てられた。⁽⁷⁷⁾ ここから後にローマがつくられたのである。フランコは彼の家族とともに遠方のライン河畔に定住し、喜んでその地に小トロイアを建設した。⁽⁷⁸⁾ 彼らは故郷の河の名に因んで小川をザンテ (Sante) と名付けた。⁽⁷⁹⁾ 彼らは海の代わりにライン河を利用し

た。以来この地にはフランク人が増加した。彼らはカエサルに完全に臣従したが、しかし彼を煩わせもした。

24

〔三九九—四一四行目〕

カエサルがローマへ帰還した時、ローマ人は彼を歓迎しようとはしなかった。彼らは言った、カエサルは傲慢さにより多数の兵を失った、許可も得ず異国の地に長く留まりすぎたためであると。これに怒ったカエサルはドイツの地へ戻って行った。⁽⁸⁰⁾そこには彼が知り合った数多の優れた勇士がいた。その地を治めていた貴族たちに使者を送ったカエサルは、彼らすべてに己が窮状を訴え、光輝く黄金を差し出した。彼は言った、これまでに与えた損害に対しては、喜んでその埋め合わせを致そうと。

25

〔四一五—四三六行目〕

カエサルの願いを聞いた彼らは彼のもとへと集まった。ガリアとゲルマニアの地から数多の軍勢がやってきた、⁽⁸¹⁾光輝く兜と頑丈な鎖帷子を身に纏いて。彼らは立派な楯を携えていた。渦潮の如く、彼らはローマへ向かつて雪崩れ込んだ。カエサルがローマに近づいた頃、多くの者が彼を恐れた。⁽⁸²⁾何故なら、彼らは太陽の下で光輝くカエサルの大軍を目にしたからである。この大軍は彼らに向かって戦旗をつき立てていた。彼らは自らの生命を失うことを恐れたのである。カトーとポンペイウスはローマを離れた。すべての元老院議員が恐れを抱いてそこから逃げ去った。カエサルは彼らを追跡し、エジプトの彼方まで追い立てた。かくて戦火は激しくなりぬ。

26

〔四三七—四四八行目〕

軍隊や部族を引き連れて、東方よりカエサルに向かって攻め来たる敵兵の数を、数え切れる者が果たしていようか。その様はアルプスに降る雪の如く、あるいはまた雲より降れる雹の如くであったのだから。カエサルは数では劣る軍勢でもって、敢然とこれらの群集に立ち向かった。書物にも書かれてあるように、この戦はこの世で戦われた最も激しい戦闘となった。⁽⁸³⁾

27

〔四四九—四六二行目〕

嗚呼、軍馬の押し寄せた所で、甲冑を打ち合う音が如何ばかりに凄まじく鳴り響いたことか。戦闘の喇叭が鳴り渡り、血の川が流れた。⁽⁸⁴⁾地上には雷鳴が轟き、地獄は灼熱の炎を燃やした。そこにおいてこの地上で最高の者たちが剣でもって敵対し合った。そこには数多の軍勢がいたが、彼らは血にまみれた。そこでは勇壮なポンペイウスの兵士らが兜を貫かれて死んでいるのを目にすることができた。カエサルは勝利を収めたのである。

28

〔四六三—四八〇行目〕

若きカエサルは帝国全土を手に入れたことを喜んだ。今や権力を獲得した彼は、望むがままにローマへ入った。ローマ人は彼を迎え入れ、ここに新たな慣習がつけられた。彼らは支配者を尊称で呼びかけたのである。⁽⁸⁵⁾彼らはカエサルに敬意を表してこの呼び方を考案したのであるが、それというのもかつて多数の者に分配されていた権力が今や彼

一人の手に握られることになったからである。その後、カエサルはこの慣習を賛辞とみなしてドイツの人々にも学ばせた。⁽⁸⁶⁾彼はローマの宝物庫を開けて、数多の宝石を取り出し、高価な絹織物や金を自らの家臣に与えた。爾来、ドイツの人々はローマにおいて愛され重んじられた。

29

〔四八一—四九四行目〕

カエサルが亡くなった後、優秀な彼の甥が帝国を手中に収めた。名高きアウグストゥスがその人であった。彼の義息の一人ドウルスが建設したアウクスブルクは、彼の名に因んでつけられたものである。⁽⁸⁷⁾ドイツの諸地方に秩序をもたらすため、貴族のアグリッパが派遣され、民が彼を畏れるようにと都市が築かれた。彼は都市をコロニアと名付け、爾来多くの支配者がこの地に居を構えた。⁽⁸⁸⁾さらにこの都市は彼の名に因んでアグリッピナと呼ばれたのであった。⁽⁸⁹⁾

30

〔四九五—五一八行目〕

この都市にはローマから頻繁に支配者たちがやって来た。彼らはそれ以前にすでにドイツの地に堅固な都市、ヴォルムスとシュバイヤーを有していた。⁽⁹⁰⁾カエサルがこの地方にやって来てフランク人のもとに拠点を築いた時、彼らはこれらの都市を建設したのである。その際、カエサルはライン地方に居を構えた。マインツはその当時防衛を施された都市であり、数多の勇士がこの町を拡大させた。⁽⁹¹⁾ここは今日、国王聖別の地であり、教会会議の中心地である。⁽⁹²⁾カエサルの従士メツツイウスはメツツを建設した。⁽⁹³⁾トリアーは古の都市であり、ローマの

権力者たちがこの都市を飾り立てた。ここから石で造られた地下水道を通じて、遠方のケルンヘブドウ酒が贈られた、⁽⁹⁴⁾この町に居を構えるすべての支配者たちに対する友好の贈り物として。彼らの権力は絶大であった。

31

〔五一九—五三四行目〕

アウグストゥスの時代、神が天より下界をご覧になられた。天の軍勢が付き従う一人の王がその時生まれたのである、聖なる処女マリヤによって神の子イエス・キリストが。ほどなくローマには神の聖なる徴が現れた。すなわち、大地より混じり気のない油がほとばしり出たのである。⁽⁹⁵⁾其は美しく流れ、国土を覆った。さらに炎や血の如き深紅の環が太陽を取り囲んだ。今や新しい王国が近づいたのである。⁽⁹⁶⁾それにより、我々すべてのために救いが訪れた。この王国には全世界が服従せねばならない。

32

〔五三五—五六〇行目〕

使徒聖ペテロはローマで悪魔を征服した後、その地に聖なる十字の標を打ち建て、キリストにこの都市を譲渡した。ローマからペテロは布教のためフランク人のもとへ三人の聖人を派遣した。⁽⁹⁷⁾エウカリウスとヴァレリウス、そしてもう一人は岩山にて亡くなった。二人はローマへ戻り、聖ペテロにこのことを嘆き訴えた。ペテロより杖を授かった彼らは、マテルヌスの墓の上にこの杖を置いた。彼らはマテルヌスに命じた。死より甦りて、聖ペテロの命に従い彼らと共にフランク人のもとへ行くようにと。師の名を聞いたマテルヌスは、直ちに彼らの

命に従った。神のご意志により大地が開き、彼は四十日間眠っていた墓から急いで身を起こして、しっかりと草地に立ち上がったのである。彼はこの後四十年間生きることとなる。かくして三人は先ずトリアーにて布教を行い、その後ケルンの民を改宗させた。死より甦ったマテルヌスはその地で司教となった⁽¹⁰⁾。

33

〔五六一—五七六行目〕

彼らはその後フランク人のもとで神への奉仕のために多くの民を獲得した。かつてカエサルが多くの民を獲得した戦闘よりもより良き戦いによつて。彼らは人々に神の良き戦士となるべく罪と戦うよう教えた⁽¹⁰⁾。彼らの後に司教となったすべての者が、この教えを熱心に広めた。聖アノーに至るまで三十三人の司教がこの地を治め、そのうち七人が聖人となった⁽¹⁰⁾。彼らは夜空に輝く七つの星の如く、天上に輝き我々を照らす。その中でも聖アノーは一際明るく輝き、模範となつてゐる。彼は柘榴石が黄金の指輪に輝きを加えるが如く、他の聖なる司教たちに輝きを加えたのである。

34

〔五七七—五九六行目〕

我々はこので教訓のために、この卓越せる人物アノーについて語るとしよう⁽¹⁰⁾。善良にして誠実たらんと欲する者は彼を模範にすべきである。皇帝ハインリヒ三世が彼を司教に任じ、神がこれに同意した後、ケルンにて栄光ある地位についた彼は、大勢の群集を伴つて現れた。天と地の間にあり、双方を照らす太陽の如く、司教アノーは神と人間の前に歩み出た⁽¹⁰⁾。王の宮廷においてすべての帝国諸侯が彼の下位に置

かれるほど、彼の権力は強大であつた。彼は神への奉仕において天使の如くであつた。アノーは神と人間の双方において名声を博した。それゆえ彼は真の支配者と見なされた。

35

〔五九七—六一四行目〕

彼の善良さを知る者は極く僅かしかいなかった。今や聞かれるがよい、彼がどのように生き、如何なる行いをなしたかを。彼は率直な言葉で語り、真実のために誰も恐れなかった。獅子の如く諸侯を支配し、子羊の如く貧しき人々と交わつた。愚か者には厳しく、善良な者には親切であつた。彼は寡婦と孤児を大いに称えた。彼以上に説教や罪の赦しを行なうことのできた司教はいなかった。彼は非常に敬虔であつたため、当然ながら誰もが彼に好意を抱かずにはいられなかった。彼は神を非常に愛した。このような司教に相應しかりしケルンの民は幸福であつた。

36

〔六一五—六三〇行目〕

夜に人々が皆寝静まつた頃、敬虔なアノーは起き上がった。多くの教会を訪れ、跪いて心からの祈祷を捧げた⁽¹⁰⁾。彼は自分に納められた賃租物を所持していた。アノーは住む所もなく彼の方を見ている貧しき者に気付いた。そこには貧しき女性が子供と一緒に横たわつてゐたが、誰一人として彼女らの面倒を見るものがなかった。この聖なる司教は彼女のもとへ行き、懇切に寝る場所を用意してあげた。このために彼は正しくも「すべての孤児の父」と呼ばれたのである⁽¹⁰⁾。アノーは孤児に対して非常に憐れみ深かつた。それゆえ神は彼に報いを与えら

れた。

37

〔六三二—六四六行目〕

敬虔なる司教が統治権を有していた時代、帝国は非常に幸福であった。アノーが若きハインリヒを統治者となるべく教育していた時代には⁽¹¹⁾。彼が摂政についていたことは遍く知られていた。ギリシアとイングランドの国王はこのためアノーに贈り物を送った。デンマーク、フランドル、ロシアからもこれと同様のことが行われた。⁽¹²⁾ケルンにおいて多くの所領を手に入れたアノーは、神への愛を促すために、至る所で教会を飾り立てた。⁽¹³⁾彼自身も四つの修道院を建立し、彼がとりわけ愛したジークブルクに五つ目の修道院を建立した。その修道院には今日彼の墓がある。⁽¹⁴⁾

38

〔六四七—六五八行目〕

大いなる名声が彼の魂を損なうことがないようにと、神はアノーに對して、美しい留め金を作る時に金細工匠が行うのと同じことを行わせた。金細工匠は金を火に溶かし、技巧を凝らして流麗な金の模様を入れることにより、高価な留め金を作り上げる。黄玉を美しく磨き上げ、さらにまた様々な加工でもって留め金に光沢ある輝きを与える。同様に、神も聖アノーを様々な試練⁽¹⁵⁾によって磨き上げられたのである。

39

〔六五九—六七四行目〕

地方の領主たちはしばしばアノーを攻撃したが、神はすべてのもの

を彼の名声へと変えられた。アノーを庇護すべきであるはずの者が、彼に對して幾度となく陰謀を企てた。彼によって支配者の地位につけられた者が、幾度にもわたってアノーを侮蔑した。ついにアノーは武力でもって都市より追放されてしまった。⁽¹⁶⁾かつてアブサロムが敬虔な父ダビデを追放したように⁽¹⁷⁾。この二つの出来事は互いに非常に似通っている。敬虔なる司教は聖なるキリストに倣って、多くの困苦と艱難に耐えねばならなかった。だが神は天においてこれに報いられた。

40

〔六七五—六八六行目〕

ハインリヒ四世のもとで帝国が秩序を失いし時、悪しき争いが始まり、多くの生命が失われた。殺人、略奪、放火は教会と国土を荒廃させ、其はデンマークからアプリア、フランスからハンガリーにまで及んだ。⁽¹⁸⁾忠誠をもつて團結すれば何者も對抗しえぬ者たちが、強大な軍隊を親族や同郷の人々に對してさし向けた。帝国はその武器を自らのはらわたに向け、勝利を収めたその手でもって自らを傷つけた。そのため、キリスト者たちの亡骸は埋葬されることもなくうち捨てられ、吼える灰色の狼の餌食となった。仲裁の可能性が失われた時、アノーにはこれ以上生き続けることが重荷となった。

41

〔六九七—七一二行目〕

アノーはテューリンゲン地方のザールフェルトへ赴いた。そこにおいて神は彼に啓示を行われた。すなわち、ある日の昼頃に、天が壮麗に開かれたのである。⁽¹⁹⁾彼はこれを神の栄光と見なしたが、これをこの世の誰にも敢えて告げようとはしなかった。また彼が馬車に乗って祈

りを捧げていた時のこと、車を引いていた十六頭の馬が動けぬほどの強大な力が彼を襲った。⁽¹²⁾その時、アノーはこれが未来の予兆であることを知った。このことに驚愕した聖なるアノーは、そのため病に罹ってしまった。

42

〔七三—七三—七三四行目〕

ある夜、司教は夢を見た。⁽¹³⁾夢の中で、彼は素晴らしい玉座のある非常に豪華な宮廷の広間にいた。其はさながら天上の如くであった。そこにおいて彼は、四方の壁が黄金によって飾り立てられているのを目にした。非常に高価な貴金属が辺り一面に煌いていた。広間では歌が歌われ、様々な歓喜の声に満ちていた。そこには多くの司教たちが座っていた。彼らは星の如くともに光輝いていた。そのうちの一人は司教バルドーであった。⁽¹⁴⁾聖ヘリベルトもその中におり、黄玉の如くに輝いていた。その他、生き方と信条を共にする多くの司教らが集っていた。そこには誰も座っていない壮麗な座席があったが、聖アノーはそれのことを大変喜んだ。彼に敬意を表して、座席がそこに設けられたからである。このことに對して、アノーは神を誉め称えた。嗚呼、どれほど彼がこの座に座りたがったことか。どれほど彼がこの愛すべき玉座を我が物としたがったことか。しかし、司教たちはこれを認めようとはしなかった、アノーの胸元についていた染みのために。⁽¹⁵⁾

43

〔七三五—七五八行目〕

その時、アルノルトなる一人の司教が席を立った。彼はかつてのヴォルムス司教であった。⁽¹⁶⁾アルノルトは聖アノーの手を取り、彼を傍

らに連れていった。そこでアルノルトはアノーに親しく語りかけてこう言った。「神に愛されし司教アノーよ、神の慰めのあらんことを。そなたはその染みが取り除かれるように努めよ。まことに、そなたには永遠の玉座が用意されているのだ。染みが取り除かれさえすれば、直ちにそなたはここに在る司教たちに歓迎されるであろう。だが今はまだ、そなたは彼らのもとに留まることはできない。彼らがそなたを迎えたがっていることは自明のことである。キリストはそなたにこのことをはつきりとお示しにいられた。司教アノーよ、どれほど多くの称賛と恵みがそなたに与えられるであろうことか」。この話に心を打たれたアノーは、地上に戻ることにした。この時、彼が謙虚な人間でなかったならば、彼は天国を去ることができなかったであろう。天上の素晴らしきは非常に大きなものであるからだ。我々は古いも若きも皆、天国に思いを巡らせるべきである。こうして司教は眠りから目覚めた。アノーは何をすべきかよく知っていた。彼はケルン市民に厚意の贈り物を与えた。⁽¹⁷⁾アノーは彼らの敵であったが、それがどれほど彼らの罪であったことか。

44

〔七五九—七七三行目〕

今や神がアノーに報いられる時が近づいた。その際、彼はかつてのヨブの如く、⁽¹⁸⁾苦しみに苛まれた。頭から足まで、彼は体中の力を奪われたのである。そして彼の優れた魂は、人間的な苦痛から切り離された。彼の魂は病身の肉体から離れ、永遠の天国へと昇っていった。⁽¹⁹⁾大地は肉体を受け取り、魂は天に昇華した。我々は常に天上へと思いを向けるべきである。我々が人生の最後に辿りつくであろう処へと。

45

〔七七三―七八八行目〕

こうしてアノ一は神の御前でその列座に加わった。心気高き司教は、飛翔へと雛を誘う鷺の如くに振舞った。鷺は雛の上を飛び、旋回しながら上昇する。これに倣って雛も同じことをしたがるのである。⁽¹³⁾ 同様にアノ一は、我々が彼の後を追うべく我々を高みへと誘った。彼はここで我々に示した、天には如何なる生があるのかを。彼が亡くなったと信じられている墓前において、アノ一は素晴らしき奇蹟を行った。⁽¹⁴⁾ その場所で病人や足萎えが癒された。

46

〔七八九―八一〇行目〕

当時、アルノルトという名の尊敬すべき騎士がいた。⁽¹⁵⁾ 彼のもとにはフォルプレヒトという名の家臣がいたが、この男は世俗の罪により主人の寵愛を失ってしまった。⁽¹⁶⁾ その後フォルプレヒトは神に疑念を抱き始め、悪魔に助けを求めるようになった。彼はアルノルトに対する保護者として悪魔を選んだのである。ある日の夕方、フォルプレヒトが馬に乗って一哩以上走っていた時のこと、彼のもとに悪魔が現れた。悪魔は彼にキリスト教への信仰を一切禁じ、自分と会ったことを誰にも話してはならぬと命じた。悪魔は言った、「もしこのことを誰かに話したならば、お前を細かく切り刻んでやるからな。お前が俺に従うならば、お前は信頼すべき友を持つだろう」と。このように悪魔は脅しと約束でもってこの愚か者を誘惑し、このためフォルプレヒトは悪魔の約束を信用した。後に彼はこのことを悔やまねばならなかった。

47

〔八一―八三八行目〕

ある日のこと、フォルプレヒトはアルノルトとともに馬に乗って旅していた。彼は悪魔の約束に大変喜んでいた。あれこれ話をしているうちに、やがてフォルプレヒトは神を否定しだした。この愚か者は神の聖人たちを嘲り始め――誰もそのような厚かましきことをしてはならぬのだが――、ついには聖アノ一までも罵るようになった。彼は言った、「自分は何でも知っている。すべては醜惡な欺瞞なのだ。アノ一は常に罪の中に生きてきた。一体、彼がどんな奇蹟を行ったというのだ」と。フォルプレヒトは直ちにこの破廉恥な侮辱を償わねばならなかった。忽ちにして彼の左眼が水の如くこぼれ落ちたのである。

この不信心者はなおも反省することなく聖アノ一を罵り続けたがため、彼はさらにその代償を払わねばならなかった。直ちに彼の頭中に一撃の苦痛が襲い、彼は地面に膝をついた。そして矢の如く、彼の右眼が飛び出たのであった。彼は地に倒れ、痛みのあまり泣き叫んだ。至る所で人々はそのことにひどく驚愕した。彼らは十字を切って神に祈った。

48

〔八三九―八五三行目〕

アルノルトは命じた、フォルプレヒトを急いで馬に乗せて、彼のために聖職者を連れてくるようにと。聖職者たちはフォルプレヒトを教会に運び、彼に罪を告白するよう戒めた。ついに彼は聖アノ一に願をかけるようになった。彼はアノ一の執り成しを祈り、またアノ一によって自分の傷が癒されるようにと祈願した。そこに居合せたすべての者が大いなる奇蹟を見た。眼を抉り取られし眼窩から、再び新たに

眼が生じたのである。かくして彼は直ちに全快した。神の力の何と素晴らしきこと哉。⁽⁸⁵⁾

49

〔八五三―八七八行目〕

かつてモーセにより海が開かれしことは、旧約聖書の諸書により周知のところである。⁽⁸⁶⁾その時、モーセは海の本真中の乾いた道を通つて、イスラエルの民を最良の土地へと導いたのであった。敬虔な人々も同様にこの地を所有するであろう。そこは乳と蜜が流れる所。⁽⁸⁷⁾岩盤からは油がほとばしり、その傍では泉が甘い水を出した。天からはパンが降り、人々はあらゆる富で満たされた。⁽⁸⁸⁾神は奇しき徴でもつて聖なる人モーセを称えられた。その後、彼の姉妹の一人が彼に対して非難を唱えた。⁽⁸⁹⁾彼女がどれほど激しく癪病に苛まれたことか、善良なる兄弟モーセが彼女を助けるその時まで。同様にアノーもフォルプレヒトを助けて彼の傷を癒した。これは、我々が神の力と善意を理解するためである。神は力強くすべての者に報酬あるいは天罰を与えられる。神が親しきをもつて、かつ遅延なく天の楽園へと連れて行かれる御自身の忠実なる僕たちについて語るすべての者に。

註 解 題

(1) 『アノーの歌』の成立年代と成立場所については、U. Liebertz-Grün, *Zum Annolied. Atypische Struktur und singläre politische Konzeption*, in: *Euphorion* 74, 1980, S. 223-256, bes. 255ff. および E. Nellmann, *Das Annolied*, Stuttgart 1999, Nachwort, S. 189f. を参照。また作者の出身地に関しては、言語学的観点から中部フ

ランケン地方（ここにはケルンとジークブルクも含まれる）に求めるのが一般的であるが、近年ではヘッセン・テューリンゲン方言地方の出身とする見方も現れている。Th. Klein, *Zur Sprache und Herkunft des Annolied*, in: *bickelwort und wildin maere' Festschrift für Eberhard Nellmann zum 65. Geburtstag*, D. Lindemann u.a. (Hg.), Göttingen 1995, S. 1-36.

(2) 救済史 (Heilsgeschichte) と世界史 (Weltgeschichte) はともに聖書に基づくキリスト教的歴史観である。救済史は天地創造からキリストの受難を経て最後の審判へと至る人類の普遍的歴史を対象とし、世界史はその枠組みの中で展開される地上の国の歴史変遷を取り扱う。キリスト教的歴史観・歴史叙述については、W・サザーン『歴史叙述のヨーロッパ的伝統』大江善男他訳、創文社、一九七七年、岡崎勝世『聖書vs世界史——キリスト教的歴史観とは何か』講談社現代新書、一九九六年、兼岩正夫『ルネサンスとしての中世 ラテン中世の歴史と言語』筑摩書房、一九九二年、池上俊一『ロマネスク世界論』名古屋大学出版会、一九九九年などを参照。

(3) 中世ドイツ語において、「ドイツ」を表す *diutisc* という語が最初に確認されるのは一〇〇〇年頃（ザンクト・ガレン修道院のノートカー）のことであるが、そこではまだ言語呼称の形容詞に使用が限られていた。『アノーの歌』においてはじめて「ドイツの人々 (*diutisch lute*)」や「ドイツの地 (*diutsche lant*)」といった民族名・国土名を示す固有辞が現れるに至った。なお、ラテン語で「ドイツ」を表す *teutonicus* という言葉は、イタリ

アではすでに九世紀に固有辞として用いられていたが、自称として(つまりドイツにおいて)「ドイツ人 (teutonic)」や「ドイツの地 (tellia teutonum)」といった民族名・国土名が見られるようになるのは十一世紀初めのことであり、また「ドイツ王国 (regnum teutonicum)」という表現が現れるのは、ようやく一〇七〇年代半ばになってからである。「ドイツ」概念の問題に関しては多くの研究があるが、ここでは差し当って、H・トーマス『中世の「ドイツ」——カール大帝からルターまで』三佐川亮宏・山田欣吾訳、創文社、二〇〇五年、E.Müller-Mertens, *Regnum Teutonicum. Aufkommen und Verbreitung der deutschen Reichs- und Königsaufassung im früheren Mittelalter*, Berlin 1970, J.Ehlers, *Die Entstehung des deutschen Reiches*, München 1994 など⁵⁾を参照。邦語文献としては、山田欣吾「「ドイツ国」のはじまり——レグヌム・テウトニクム概念の出現と普及をめぐって」、同『教会から国家へ——古相のヨーロッパ』創文社、一九九二年、二八三—三〇六頁、三佐川亮宏『ザルツブルク大編年誌』九二〇年の項に見える「ドイツ王国」概念の同時代性をめぐって——九世紀後半における teodiscus / teutonicus の用例からの検証の試み』『東海大学紀要文学部』第六五号、一九九六年、三三—一〇〇頁、同「フランク」と「ドイツ」の狭間——初期オットーネン治下の王国と支配者の呼称について』『西洋史学』第一八八号、一九九七年、一一二頁、同「オットー三世・ローマ帝国の復興・Teutonic」——生成期における「ドイツ人」のアイデンティティをめぐって』『歴史学研究』第七四五

号、二〇〇一年、三四—五一、六一頁、同「叙任権闘争」と regnum Teutonicum——「ドイツ」概念の政治的・歴史的地平(上)(下)』『東海大学紀要文学部』第七五号、二〇〇一年、一二七頁、第七六号、二〇〇一年、一二七頁などがある。

- (4) 『アノーの歌』以前には、中世ドイツの歴史叙述において、ザクセン人、フランク人、バイエルン人などの枠を越えた共通の民族史、すなわち「ドイツ人」の歴史というものは存在しなかった。H・トーマスは一九七七年の論文の中で、『アノーの歌』の一九節以下について、「様々な部族の起源 (Stammes-Origines) をドイツ人の起源説話 (origo gentis Teutonicorum) へ統合しようとした「中世における最初の「さしおさる」は唯一の試み」と述べている。H.Thomas, Bemerkungen zu Datierung, Gestalt und Gehalt des Annolied, in: *Zeitschrift für Deutsche Philologie* 96-1, 1977, S.24-61, hier S.49.

- (5) ケルン大司教アノーについては、G.Jenal, *Erzbischof Anno II von Köln (1056-75) und sein politisches Wirken. Ein Beitrag zur Geschichte der Reichs- und Territorialpolitik im 11.Jahrhundert*, 2Bde., Stuttgart 1974-75, Monumenta Amonis, Köln und Sieburg, *Weltbild und Kunst im hohen Mittelalter*, Köln 1975, F.W.Oediger, *Das Bistum Köln von den Anfängen bis zum Ende des 12.Jahrhunderts*, Köln 1972 (2.Auflage), S.114-128 など⁶⁾を参照。
- (6) ケルンの一〇七四年の反乱に関しては、H・プラーニッツ『中世ドイツの自治都市』林毅訳、創文社、一九八三年、同『中世都市成立論 (改訳版)』佐々木克巳訳、未来社、一九九五年の

他’ T.Diederich, *Revolutionen in Köln 1074-1918*, Köln 1973, ders, Anno und seine Köher, in: *Sankt Anno und seine viel liebe statt. Beiträge zum 900 jährigen Jubiläum*, G.Busch (Hg.), Siegburg 1975, H.Stehkämper, Die Stadt Köln in der Salierzeit, in: *Die Salier und das Reich*, Bd.3, S.Weinfurter (Hg.), Sigmaringen 1991, K.Schulz, „Denn Sie lieben die Freiheit so sehr“, Darmstadt 1992, bes.S.75-86などを参照。邦語文献としては、佐々木克巳「一〇七四年ケルン暴動に関する一考察——中世ケルン都市共同体成立過程研究序説」『一橋論叢』第四八巻第一号、一九六二年、三五—五六頁、林毅「ケルン都市共同体の成立」、同『ドイツ中世都市法の研究』創文社、一九七二年、六一—一六三頁、魚住昌良「一〇七四年ケルンの市民と大司教」『国際基督教大学学報 アジア文化研究別冊三』一九九二年、一九九二年、一九三—二〇六頁を挙げておく。

- (7) M.Mittler, Amos Heilssprechung und Verbreitung, in: *Siegburger Vorträge zum Annojahr 1983*, ders (Hg.), Siegburg 1984, S.41-74, R.Neumüller-Klauser, Die Kanonisation des heiligen Anno, in: *Sankt Anno und seine viele liebe statt*, S.439-446.

- (8) このような批判は、アルバ司教ベンツォの『皇帝ハインリヒ四世に捧げる書』や『聖レマクルスの勝利』、ブレーメンのアダムの『ハンブルク司教事績録』などに見られる。Benzonis *episcopi Albenensis ad Heinrici IV imperatorem libri VII*, G.H.Perz (Hg.), in: *Monumenta Germaniae Historica Scriptores* (以下略) MGH SS Ⅱ(略) Bd.11, Hannover 1854, S.591-681, bes.S.632ff, *Triumphus*

S.Remaci Stabulensis de coenobio Malmundariensi, W.Wattenbach (Hg.), in: *MGH SS Bd.11*, Hannover 1854, S.433-461, *Adam Bremensis magistri Gesta Hamburgensis ecclesiae pontificum*, B.Schmiedler (Hg.), *MGH SS rerum Germanicarum in usus scholarum* Bd.2, Hannover 1917 (2.Auflage), S.175ff.

- (9) 前註に挙げた『聖レマクルスの勝利』(S.440) および『ブラウヴァイラー修道院創建史』(*Bruuiliarensis monasterii undatorum actus*, H.Pabst (Hg.), in: *Archiv der Gesellschaft für ältere deutsche Geschichtskunde*, Bd.12, 1874, S.147-192, bes.S.183ff) 参照。

- (10) ヘルスフェルトのランペルト『編年誌』(*Lamberti Annales*, in: *Lamberti monachi Hersfeldensis Opera*, O.Holder-Egger (Hg.), *MGH SS rer.Germ.in usu.schol.* Bd.38, Hannover 1894, S.1-304, hier S.185-193)。なお、一〇七四年の事件に関するランペルトの記述箇所は、佐々木克巳「一〇七四年春——ケルン事件(上)」『成蹊大学経済学部論集』第二六巻第一・二号、一九九六年、八三—九四頁に訳出されている。また、ランペルトとアノーについては、井上雅夫「ランペルトの見るアノーとその時代(一—四)」『同志社大学人文学』一七三号、二〇〇三年、二二—五四頁、一七五号、二〇〇四年、一一二七頁、一七七号、二〇〇五年、四〇—七三頁、一七九号、二〇〇六年、一一三一頁を参照。
- (11) この聖人伝はジークブルク修道院長レギンハルト(在任一〇七六—一〇五年)によって書かれたが、今日断片的にしか残っていない。N.Eickermann, *Zwei Soester Fragmente aus Reginhards*

verlorener Vita Annonis, in: *Soester Zeitschrift* 88, 1976, S.5-27, H.Thomas, Ein Quellenfund zum Annolied. Die Fragmente von Reginhards Vita Annonis, in: *Zeitschrift für deutsche Philologie* 97, 1978, S.403-414, R.Schieffer, Ein Quellenfund zu Anno von Köln, in: *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters* 34, 1978, S.202-213, T.Struve, Reginhard von Siegburg und Lampert von Hersfeld. Hersfelder und Siegburger Überlieferungen um Erzbischof Anno im Lichte der Soester Fragmente, in: *Rheinische Vierteljahrsblätter* 42, 1978, S.128-160. なお、一〇五一年頃には新たにアノーの聖人伝がつくられた¹²。S.Coué, *Hagiographie im Kontext. Schreibnals und Funktion von Bischofsiten aus dem 11. und vom Anfang des 12. Jahrhunderts*, Berlin 1997, S.146-171.

(12) 帝国教会政策について、L.Santifaller, *Zur Geschichte des ottonisch-salischen Reichskirchensystems*, Wien 1964, T.Reuter, The Imperial Church System of the Ottonian and Salian Rulers. A Reconsideration, in: *Journal of Ecclesiastical History* 33, 1982, S.347-374, J.Freckensten, Problematik und Gehalt der ottonisch-salischen Reichskirche, in: *Reich und Kirche von dem Investiturstreit*, K.Schmid (Hg.), Sigmaringen 1985, S.83-98. などの他、邦語文献として渡部治雄氏の一連の研究から幾つかを挙げておく。渡部治雄「叙任権闘争前における国王の教会支配体制」、『吉岡昭彦編『政治権力の史的分析』御茶の水書房、一九七五年、四五—七五頁、同「叙任権闘争直前期における帝国教会制をめぐる諸問

題』『西洋史研究』新輯第八号、一九七九年、七二—九七頁、同「オットー―ザリエル朝の帝国教会制に関する基礎的研究(二)」、『東北大学教養部紀要』第四七号、一九八七年、四二—六五頁、同「帝国教会制成立史序説——ドイツ王国から帝国へ」、『佐藤伊久男・松本宣郎編『歴史における宗教と国家』南窓社、一九九〇年、一九七—二四二頁。

(13) しかし、このことは『アノーの歌』の作者が皇帝派もしくは反教皇派に属していたことを直ちに意味するものではない。この詩には、必ずしも皇帝寄りとはいえない記述(例えば、四〇節のハインリヒ四世に関する記述や、対立国王の聖別が行なわれたマインツに関する二〇節の記述など)も見られるからである。また、この詩においては同時代の皇帝や教皇に関する言及が意外に少なく、そこから『アノーの歌』の作者の政治的立場を読み取ることは困難であるといわざるをえない。『アノーの歌』の作者の政治的意図をめぐる問題については、U.Liebertz-Grün, *Zum Annolied*, S.244ff. を参照。

(14) D.Knab, *Das Annolied. Probleme seiner literarischen Einordnung*, Tübingen 1962, S.75-113. クナブはとりわけニーダーロートリンゲン地域を対象に考察している。なお、ロートリンゲン地域における歴史叙述の発展について詳しくは、W.Wattenbach, R.Holzmann, *Deutsches Geschichtsquellen im Mittelalter. Die Zeit der Sachsen und Salier*, Teil 1-2, Weimar 1967 (Neuausgabe) に詳しい。

(15) D.Knab, *Das Annolied*, S.89-97 に拠る。Folcuini gesta abbatum

- Lobensium*, G.H.Pertz (Hg.), in: *MGH SS* Bd.4, Hannover 1841, S.52-74, *Herigeri gesta episcoporum Leodiensium*, in: R.Koepke (Hg.), *MGH SS* Bd.7, Hannover 1846, S.161-189, *Gesta episcoporum Cambracensium*, L.C.Behmann (Hg.), in: *MGH SS* Bd.7, S.402-89.
- (16) *Chronicon Hugonis monachi Virdunensis et Divionensis, abbatis Flavinacensis*, in: *MGH SS* Bd.8, Hannover 1848, S.288-502, *Gesta Treverorum*, G.Waiz (Hg.), in: *MGH SS* Bd.8, S.111-200.
- (17) E.Nellmann, *Das Annolied*, Kommentar, S.77f., A.Haas, *Der Mensch als „dritte welt“ im Annolied*, in: *Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur* 95, 1966, S.271-281. アイルランド出身の神秘主義哲学者ヨハネス・スコトゥス・エリウゲナ(八一〇頃—八七七年以降)について詳しくは、G.Schrimpf, Art. Johannes Scotus Eriugena, in: *Lexikon des Mittelalters* Bd.5, München / Zürich 1991 (10.Lieferung), S.602-605 および R・L・シロニス「エリウゲナの人間論——神の像としての人間」同『エリウゲナ思想と中世の新プラトニズム』創文社、一九九二年、一六六—一八五頁を参照。
- (18) 「四世界帝国論」の変遷については、岡崎勝世「聖書 vs 世界史」、一三—四九頁を参照。また「ダニエル書」の古代末から中世における受容については、W. Goetz, *Die Danielrezeption im Abendland—Spätantike und Mittelalter*, in: *Europa, Tausendjähriges Reich und Neue Welt. Zwei Jahrtausende Geschichte und Utopie in der Rezeption des Danielbuches*, M.Delgado u. a. (Hg.), Freiburg 2003, S.176-196 参照。
- (19) 「六世界年代」は、神が六日間で世界を完成し七日目に安息されたとする「創世記」(一章—二章三節)の記述をもとに、人類の歴史を六つの時代に区分する考えである。アウグスティヌスによれば、アダムの創造からノアの洪水までが第一期、ノアの洪水からアブラハムまでが第二期、アブラハムからダビデまでが第三期、ダビデからバビロン捕囚までが第四期、バビロン捕囚からキリストの生誕までが第五期、そしてキリスト生誕から最後の審判までが第六期となる。アウグスティヌス『神の国』(五)「服部英次郎・藤本雄三訳、岩波文庫、一九九一年、四九四頁(第二二卷二〇章)。「六世界年代」については、岡崎勝世『聖書 vs 世界史』、四三—四四頁を参照。
- (20) A.D.van den Brincken, *Studien zur Weltchronistik bis in das Zeitalter Otto Freising*, Düsseldorf 1957, S.235f.
- (21) *Bernoldi Chronicon*, G.H.Pertz (Hg.), in: *MGH SS* Bd.5, Hannover 1844, S.400-467, hier S.401f., *Ekkehardi Chronicon*, D.G.Waiz (Hg.), in: *MGH SS* Bd.6, Hannover 1844, S.33-231, hier S.53.
- (22) E.Nellmann, *Die Reichsidee in deutschen Dichtungen der Salier- und frühen Stauferzeit*, Berlin 1963, S.46ff., Chr.Gellinek, *Daniel's Vision of Four Beasts in Twelfth Century German Literature*, in: *The Germanic Review* 41, 1966, S.5-26.
- (23) *S.Eusebii Hieronymi Comentarium in Danielen prophetam ad pammachium et marcellam liber*, in: J.P.Migne (Hg.), *Patrologiae*

cursus completus. Series latina 25, Paris 1844, S.491-583, hier S.530. E.Nellmann, *Die Reichsidee*, S.51ff. なお原文では「詩篇」七九章一四節と記されている。

- (24) 確かに、『アノーの歌』においてもヒエロニムスと同様、反キリストの出現によりローマ帝国の崩壊が示唆されているのであるが、しかし反キリストに関する記述は簡潔なもので、ヒエロニムスのような終末論的なペニシズムは見られない。また、反キリストの出現に先立って現れる「十人の王」の解釈においても相違が見られ、彼らによって帝国が分裂したとするヒエロニムスに対して、『アノーの歌』では十人の王とローマ人との団結が前面に打ち出されている。D.Nellmann, *Die Reichsidee*, S.54f.

- (25) フランク人のトロイア起源説話については、F.Graus, *Lebendige Vergangenheit. Überlieferung im Mittelalter und in den Vorstellungen vom Mittelalter*, Köln / Wien 1975, S.81-89, E.Ewig, *Trojanmythos und fränkische Frühgeschichte*, in: *Die Franken und die Alemannen bis zur „Schlacht bei Zülpich“* (496 / 97), Dieter Geuenich (Hg.), Berlin / New York 1998, S.1-30, H.H.Anton, *Troja-Herkunft, origo gentis und frühe Verfaßtheit der Franken in der gallisch-fränkischen Tradition des 5.bis 8.Jahrhunderts*, in: *Mitteilungen des Instituts für Österreichische Geschichtsforschung* 108, 2000, S.1-30 を参照。また、ザクセン人の起源説話については、F.Graus, *Lebendige Vergangenheit*, S.112-144 を参照。このテーマに関連して邦語文献では、佐々木博光「出自神話でみるドイツ史」『京都大学人文学報』第七一号、一九九二年、九七—

一二三頁がある。

- (26) E.Nellmann, *Die Reichsidee*, 59f. バイエルン人の起源説話については、F.Graus, *Lebendige Vergangenheit*, S.109-111, M.Müller, *Die bayerische „Stammesgeschichte“ in der Geschichtsschreibung des Mittelalters*, in: *Zeitschrift für bayerische Landesgeschichte* 40, 1977, S.341-371, W.Störmer, *Beobachtungen zu Aussagen und Intentionen der bayerischen Stammes-„Sage“ des 11. / 12.Jahrhunderts. Fiktionen — Sage — „Geschichtsklitterung“ in: Fälschungen im Mittelalter*, Teil 1, Hannover 1988, S.451-470 を参照。

- (27) 『アノーの歌』は長らくドイツ文学の側から研究が行なわれてきたが、H・トーマスによって取り上げられるまで歴史学の側から考察が行なわれることは殆どなかった。H.Thomas, *Bemerkungen* (註4) の他、「ドイツ」概念に関する同氏の重要な論文をまとめた邦訳『中世の「ドイツ」』(註3)、『その中でもとりわけ第五論文「ユリウス・カエサルとドイツ人——グレンゴリウス七世・ハインリヒ四世期におけるドイツ人の歴史意識の形成とその内容」(一九九一年)は重要である。近年の研究では、J.Ehlers, *Die Entstehung des deutschen Reiches* (註3), S.44f. u. S.93, ders., *Erfundene Traditionen? Zum Verhältnis von Nationsbildung und Ethnogenese im deutschen und französischen Mittelalter*, in: *Zur Geschichte der Gleichung „germanisch—deutsch“. Sprache und Namen, Geschichte und Institutionen*, H.Beck u.a.(Hg.), Berlin / New York 2004, S.131-162, hier 138f., E.Müller-Mertens, *Römisches Reich im Besitz der Deutschen, der König an Stelle*

des Augustus, in: *Historische Zeitschrift* 282, 2006, S.1-58, bes. S.20ff. などにおいて『アノーの歌』に関心が寄せられている。また、我が国でも三佐川亮宏氏が「叙任権闘争」と *regnum Teutonicum* (下) (註3) において『アノーの歌』を取り上げている。

- (28) 「帝権移転論」とその変遷について詳しくは、W.Goez, *Translatio Imperii. Ein Beitrag zur Geschichte des Geschichtsdenkens und der politischen Theorien im Mittelalter und frühen Neuzeit*, Tübingen 1958, E.Müller-Mertens, *Römisches Reich*, S.7ff. および池谷文夫『ドイツ中世後期の政治と政治思想——大空位時代から『金印勅書』の成立まで』刀水書房、二〇〇〇年を参照。

- (29) 『アノーの歌』はアノーの聖人讃歌であるとともに、都市ケルンの讃歌でもある。二九—三〇節においてケルンは世界史の中で重要な地位を与えられており、また七節と三二節ではそれぞれ救済史、世界史とアノーを結ぶ結節点の役割を果たしている。ここに見られるケルンの都市讃歌は、ドイツでは最も早いものの一つといえよう。『アノーの歌』における都市ケルンの位置づけについては、D.Knab, *Das Annolied*, S.33ff. を参照。また都市讃歌に関連する文献として、A.Haverkamp, „Heilige Städte“ im hohen Mittelalter, in: *Mentalitäten im Mittelalter*, F.Graus (Hg.), Sigmaringen 1987, S.119-156 を挙げておく。

- (30) 「新しい王国」とローマ帝国との関係をめぐる問題については、E.Nellmann, *Die Reichsidee*, S.55, S.66f. を参照。ネルマンはこの「新しい王国」と第四帝国の併存関係の中に、二つの世界を結

合するところ「第三の世界」の思想とのつながりを見出している。その他 E.Reusner, *Das Annolied: Historische Situation und dichterische Antwort*, in: *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte* 45, 1971, S.212-236, bes.225f. を参照。

- (31) 『アノーの歌』の構成における数の象徴性の問題については、M.Mittenbach, *Aus der Frühzeit rheinischer Dichtung: Das Annolied*, in: *Euphorion* 39, 1938, S.17-28, E.Schwarz, *Neue Überlegungen zur Entstehung des Annoliedes*, in: *Wirkendes Wort* 40, 1990, S.304-312.

- (32) もとより、この詩の後世への影響力はケルン周辺に限られ、それを越えることはなかったと思われる。中世の写本が一点も残されていないことが、このことを物語っている。しかし、カエサルとドイツ人に関する叙述は、その後一五〇年頃に成立した『皇帝年代記』にとり入れられ、その写本の流布を通じて、十三世紀に『シュヴァーベン・シュピールゲル』、『ザクセンの世界年代記』、ヤンス・エニケル『世界年代記』へ、そして十五世紀にはヤーコプ・ツヴィンガー・フォン・ケーニヒスホーフエー『年代記』やケルンの『ケールホーフ年代記』等に受け継がれていった。H.トーマス『中世の「ドイツ」』、二五—二六頁、二〇四—二〇五頁、二五四頁、三佐川亮宏「叙任権闘争」と *regnum Teutonicum* (下)、『六頁を参照。

- (33) *Incerti Poeta Teutonici Rhythmus de Sancto Annone Colon. Archiepiscopo*, M.Opitz(Hg.), Danzig 1639. 今日これに W.Bulst

(hg.), *Das Anno-Lied*, Heidelberg 1946 に再録されてゐる。

(34) E.Nellmann, *Das Annoied*, Nachwort, S.196.

(35) E.Nellmann, ebenda, S.196.

(36) M.Roediger (hg.), *Das Annoied. MGH Deutsche Chroniken* Bd.1, 1895, K.Meisen, *Das Annoied*, Bonn 1946, F.Maurer, *Die religiösen Dichtungen des 11. und 12. Jahrhunderts*, Bd.2, Tübingen 1965, E.Nellmann, *Das Annoied*.

訳註

(1) 「古の出来事に関する歌」とは英雄叙事詩を指しており、ここに言及されている英雄たちの戦い、堅固な都市の攻落、友情の終わり、王たちの滅亡といった題材は、『ニーベルンゲンの歌』などの英雄叙事詩に好んで取り上げられるテーマである。このように世俗的な詩のテーマから話を始めて、それと対比するように宗教的なテーマへ移るという構図は、中世の宗教文学のプロローグにしばしば見られるトポスである。E.Nellmann, *Das Annoied*, Kommentar, S.75.

(2) ここでは、クリュニー派の影響を受けた当時の伝道文学の現世否定・来世願望的な傾向が見られる。しかし、この傾向はプロローグに限られ、この詩全体としてはむしろ現世肯定的な立場が貫かれている。

(3) 「ヨハネによる福音書」一章一節、「創世記」一章三節参照。

(4) この「」で記した箇所はオーピッツの版には見られず、フルカヌスの版に記されているものである。E.Nellmann, *Das*

Annoied, Kommentar S.78.

(5) 「詩篇」八章六節参照。

(6) 福音書にそのような記述は見当たらないが、ネルマンによれば、この箇所は「マルコによる福音書」一六章一五節（「すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」）にヨハネス・スコトゥス・エリウゲナが独自の解釈を加えたものに基づくものであろうという。E.Nellmann, *Das Annoied*, Kommentar S.78.

(7) 「第三の世界」に関しては、解題および解題の註17を参照。

(8) 「曙の子」を意味するルシファーはかつて権天使であったが、叛逆罪によって天上を追放され、悪魔サタンとなった。「イザヤ書」一四章一二節、「ルカによる福音書」一〇章一八節参照。

(9) 自然の秩序に関する叙述は、ボエティウスの『哲学の慰め』における次のような叙述と似通っている。「天空では衆星が万物の正しい約束に従って、昔ながらの平和を保っている。真赤な炎をあげて燃える太陽は冷たい月の車を止めはしないし、天界の北の果てで極のまわりを足早にめぐる熊座の星も、他の星が西海の波に洗われて沈むのを見ても、決してその光を大洋の水で濡らそうとはしない。(中略) 湿ったものと乾いたものは対立しつつ譲り合い、冷たいものは熱いものと親しく結ばれ、ゆらめく火は高く昇り、重い土は重さに堪えかねて下に沈む。(中略) 創造者は天上にあって万物の手綱を取って支配する」(第四卷6)、あるいは「何物も昔ながらの法則を破らないし、またおのれの位置にふさわしい仕事をやめない。万物を一定の程度のもとに支配しながら、あなたは人間の行動だけはその身にふさわ

しい節度をつけて導くことを拒む」(第一巻5)。『アウグスティヌス・ボエティウス(世界古典文学全集二二〇)』渡辺義雄訳、筑摩書房、一九六六年、四一七頁、三五九頁。

(10) ここではルシファーとアダムを指している。

(11) ここに見られる「五つの時代」とは、「六世界年代」のキリスト生誕以前の五期までを指す。

(12) 新約外典「ニコデモ福音書」二二章以下参照。

(13) 「ガラテヤの信徒への手紙」五章一節および一三節参照。

(14) 「マタイによる福音書」二八章一九節以下参照。なおここに述べられる十二使徒の事績については、「使徒言行録」や新約外典の諸行伝の他、十三世紀につくられたヤコブス・デ・ウオラギネの『黄金伝説』(全四巻、前田敬作他訳、人文書院、一九七九—八七年)の各項を参照されたい。

(15) この伝承は、ヤコブス・デ・ウオラギネ『黄金伝説』第二巻、九章(一四四頁)にも見られる。

(16) 後述22節以下を参照。

(17) 聖マウリティウスの大軍はエジプトのテーベで徴募された、キリスト教徒からなる軍団であり、伝承によればその数は六六〇〇に達していたとされる。彼らはマクシミアヌス帝によりスイスのアガウヌムで殉教を遂げたといわれるが、アガウヌムだけでなくライン地方(ケルン、ボン、クサンテン)においても殉教したと伝えられている。十世紀につくられた『聖ゲレオンの殉教録』によれば、ケルンで殉教した者の数は三二八名であり、その指導者はゲレオンなる人物であったとされる。H.E.Steine,

Kölner Heiligelegenden im 10. und 11. Jahrhundert, in: *Kaiserin Theophanu*, Bd.1, A. Ew / P. Schreiner (Hg.), Köln 1991, S.125-130.

(18) 一万一千の乙女達はウルスラ伝説で知られる殉教処女であり、十世紀につくられた伝説によれば、ブリタニア王女ウルスラは異教徒の王子との結婚を避けるために三年の猶予を得て、一万一千の乙女達とともにローマへ巡礼に赴き、その帰途ケルンでこの町を攻囲していたフン族によって殉教を蒙ったとされる。十一世紀にはこの伝説は広く知られていたが、一一〇六年に彼女達のものと思われる夥しい数の骨が発見されたことにより、ウルスラ崇敬はヨーロッパ中に拡大した。ウルスラと一万一千の乙女達は後に、ゲレオン率いるテーベ軍団と一一六四年以降ケルンへ移葬された東方の三博士とともに都市ケルンの守護聖人となった。W. Levison, *Das Werden der Ursula-Legende*, Köln 1928 および拙稿「ウルスラ伝説の形成」『中央大学大学院論究(文学研究科篇)』第三五巻第一号、二〇〇三年、三五—五〇頁参照。

(19) 後述33節を参照。

(20) 原文では *diutischemi lande*. なお、18節と24節にもこれと同様の名称 (*diutsche lant*, *diutischimo lante*) が見られる。解題の註3を参照。

(21) この七節では都市ケルンとアノーの相互的な結びつきが強調され、都市と都市領主 (*Stadther*) の理想的関係が描かれる。

(22) 『アノーの歌』において都市 (*burge*) は世界史の発展の中で重

要な役割を果たしている。世界史は都市とともに始まり、都市は世界帝国の支配の中心地である。また「ドイツ人」の歴史においても都市はローマ帝国と結びつけられ、ローマ人による支配の拠点として描かれている。その中でもケルンは最も重要な都市として位置づけられる。D.Knab, *Das Amonied*, S.33.

- (23) ニヌスはアッシリア帝国を建設したといわれる伝説上の人物（前二〇〇〇年頃）であり、古代において彼は最初の征服者と考えられていた。ニヌスの伝説は前四世紀にクテシアスによって書かれた『ペルシア史』に最初の言及が見られる。三世紀にはユスティヌスがこの伝説を取り上げ、ユスティヌスを通じてアウグスティヌスも『神の国』にニヌスの伝承を取り入れた。アウグスティヌス『神の国』（二）、服部英次郎訳、岩波文庫、一九八二年、二七六―七七頁（第四卷六章）。

- (24) 「ヨナ書」三章三節参照。

- (25) アウグスティヌス『神の国』（四）、服部英次郎・藤本雄三訳、岩波文庫、一九八六年、一三二頁（第一六卷三章）。

- (26) 「ヨナ書」二章一一節参照。

- (27) ニヌスの妻で二代の女王。セミラミスの伝説についてもクテシアス『ペルシア史』に最初の言及が見られるが、その伝説はとりわけ前一世紀に書かれたディオドロスの『世界史』によって有名となった。中世におけるセミラミスへの関心について
 45 I. Samuel, *Semiramis in the Middle Ages*, *The History of a Legend*, in: *Medievalia et Humanistica* 2, 1944, S.32-44 参照。

- (28) 「創世記」六章四節参照。新共同訳聖書では「ネフィリム」と訳

されているが、七十人訳聖書では「巨人」と記される。

- (29) 「創世記」一〇章八―一〇節参照。

- (30) 「創世記」一一章一―四節参照。

- (31) 「創世記」一一章五―九節参照。なお、ここに見られる言語の数はノアの子孫の数から導き出されたものと考えられる。

E.Nelmann, *Das Amonied*, Kommentar, S.84.

- (32) ヘロドトスの『歴史』によれば、バビロンは一辺が一二〇スタディオンの（約二キロメートル）の正方形をなす大都市であったとされる。ヘロドトス『歴史』上巻、松平千秋訳、岩波文庫、一九七一年、一三四頁（第一卷一七八章）。

- (33) 原文では *vier düssent lätterin* ʒ *lätterin* = *klätterin* は現代ドイツ語の *Klatfer* に相応。1 *Klatfer* は両手を伸ばした長さ（約六フィート）に当たる。

- (34) カルデア人は前六二五年にアッシリアから独立し、新バビロニア王国を建国。その後前六一二年にアッシリアを滅ぼした。

- (35) 前五八七年、ネブカドネザル王の下でエルサレムの破壊が行われた。「列王記下」二三章八―一〇節参照。

- (36) ダニエルの預言に関しては、解題参照。

- (37) 「ダニエル書」七章一一三節参照。

- (38) ヒエロニムスの『ダニエル書註解』では、「思うに、四つの風とは四人の天使のことである。帝国は彼らに委ねられるのである。（中略）然るに、海はこの世界を意味している」と記されている。Hieronymi *Comentarium*（解題註²³），S.527（Cap.7.2-3）。

- (39) 「ダニエル書」七章四―五節、*Hieronymi Comentarium*, S.528

(Cap.7.4).

- (40) 「ダニエル書」七章五節、*Hieronymi Comentarium*, S.529 (Cap.7.5).
なお、ヒエロニムスによれば、三重の園とはバビロニア、メ
ディア、ペルシアの三つの王国を意味するものとされる。

- (41) キュロス「二世」はペルシア帝国の建設者で、短期間のうちに
メディア、リディア、小アジアを征服し、前五三九年に新バビ
ロニアを滅ぼした。キュロスの伯父ダレイオス「一世」はペル
シア帝国の基礎を築いた。ダレイオスに関しては、「ダニエル
書」五章三〇節を参照。

- (42) 「ダニエル書」七章六節、*Hieronymi Comentarium*, S.529f. (Cap.7.5).

- (43) アレクサンドロス大王については古代より伝奇物語がつくら
れ、とりわけ三世紀のカリステネス作と伝えられる『アレクサ
ンドロス物語』は人々の間で人気を博していたが、これを四世
紀にユリウス・ヴァレリウス、十世紀にナポリの首席司祭レオ
ガラテン語に翻訳したことにより、アレクサンドロス物語は中
世ヨーロッパにおいても広く知られることとなった。伝カリス
テネス『アレクサンドロス大王物語』橋本隆夫訳、国文社、二
〇〇〇年、ナポリの首席司祭レオ訳『アレクサンデル大王の誕
生と勝利』芳賀重徳訳、近代文藝社、一九九六年。

- (44) 『アレクサンドロス大王の誕生と勝利』第三卷二七章二節、一二
〇頁参照。

- (45) 『アレクサンドロス大王物語』、ラテン語版補遺「アリストテレ
スにあてた手紙」五六―六一節、三七八―三八〇頁参照。

- (46) 『アレクサンドロス大王の誕生と勝利』第三卷二七章五節、一二

一頁参照。

- (47) アレクサンドロスの海底探検については、『アレクサンドロス大
王の誕生と勝利』第三卷二七章六節、一二二頁を参照。ただし、
そこでは「不実な家臣ら」の記述は見られない。

- (48) ヨーロッパ、アジア、アフリカの三大陸を指す。

- (49) 「ダニエル書」七章七、一九、二三節。なお、「ダニエル書」で
は「第四の獣」の正体は明らかにされていないが、ヒエロニ
ムスはこれを猪と解釈する。*Hieronymi Comentarium*, S.530
(Cap.7.7).

- (50) 「詩篇」八〇章一三節、*Hieronymi Comentarium*, S.530 (Cap.7.7).
ヒエロニムスの解釈については解題を参照。

- (51) 「ダニエル書」七章二四節。

- (52) 「ダニエル書」七章八節、八章一〇節。

- (53) *Hieronymi Comentarium*, S.534 (Cap.7.25). 「ダニエル書」には
反キリストの言及はない。聖書において反キリストが現れるの
は、新約聖書の「ヨハネの手紙一」からである。

- (54) 「天上の天使」に関しては、おそらく「ダニエル書」八章一五節
から解釈されたものと思われる。

- (55) 元老議員 (*altherinn*) の名が黄金の板に記録されたという記述
は、イシドルスの『語源論』第九卷四章一一節に見られる。*Sancti
Isidori Etymologiae libri XX*, in: Migne (hg.), *Patrologiae
cursus completus: Series latina*, Bd.82, Paris 1850, S.549. なお、中
世の歴史叙述においてローマ史はカエサルやアウグストゥスか
ら始めるのが一般的であるが、『アノーの歌』では共和政の時代

から開始される。E.Nellmann, *Die Reichsidee*, S.55ff.

- (56) 原文は *herzogin* (大公) であるが、意味内容を考えて「貴族」と訳した。

- (57) これは実際にはガリアとの戦争であるが、一〇六〇年以前に書かれた『トリリア人の歴史』によれば、カエサルとの戦いの目的はドイツのトリリアの征服にあったとされ、おそらくここから『アノーの歌』の作者はカエサルとドイツの諸地方の戦争にしたと考えられる。 *Historia Treverorum*, G.Waiz (Hg.), in: *MGH SS Bd.8*, Hannover 1848, S.146. 『アノーの歌』における『トリリア人の歴史』の影響については、H.Thomas, *Bemerkungen*, S.36ff. を参照。

- (58) ガリアでの戦闘は実際には七年であるが、ルカヌスの『内乱記(ファルサロス)』第一卷二八三行では、十年間にわたって戦闘が続いたところ。Lucan, *The Civil War* (The Loeb Classical Library), J.D.Duff (trans.), London, 1962, S.24 (l. 283).

- (59) シュヴァーベン人の海外起源伝説については『アノーの歌』が最初に言及した史料であり、その出身地は具体的に述べられていないが、世界四帝国論との関係からおそらくバビロニアに由来するのではないかと考えられる。E.Nellmann, *Die Reichsidee*, S.59.

- (60) 「スエヴォの山」についてはプリニウスの『博物誌』に言及が見られ、またイシドルスの『語源論』ではスエービ族とスエヴォ山の結びつきが述べられている。『プリニウスの博物誌』(一)、中野定雄他訳、雄山閣、一九八六年、一九九頁(第四卷一三章九

六節) *Isidori Etymologiarum*, S.358 (IX, 2, 98).

- (61) レーゲンスブルクの歴史は、ティベリウス帝の時代にローマ軍がドナウ河に進出して築いた防塞に始まるが、『アノーの歌』ではレーゲンスブルクはすでにカエサルの時代に都市になっていたとされる。レーゲンスブルクの歴史については、P.Schmid (Hg.), *Geschichte der Stadt Regensburg*, Regensburg 2000, 瀬原義生『ドイツ中世都市の起源』未来社、一九九三年、三六九頁以下参照。

- (62) ノリクムの剣については、ホラティウス『歌集』第一卷一六歌、同『エポドン』、およびペトロニウス『サテュリコン』七〇章三節に言及が見られる。『ホラティウス全集』鈴木一郎訳、玉川大学出版部、二〇〇一年、三一八頁と二六八頁、ペトロニウス『サテュリコン』国原吉之助訳、岩波文庫、一九九一年、一二四頁参照。なお、ノリクムはローマ帝国の属州で、ドナウ河南岸に位置し、ほぼ今日のオーストリアに相当するが、すでにカロリング時代以来ノリクムとバイエルン大公領は等値化されていたようである。M.Müller, *Die bayerische „Stammesage“*, S.346.

- (63) バイエルン人のアルメニア起源に関しても、『アノーの歌』が初史料である。古代のアルメニアはペルシア帝国領に属していたことから、バイエルン人の起源をペルシアに求めることができよう。『アノーの歌』におけるバイエルンの起源説話は、一一四〇年頃に書かれた『パッサウ司教アルトマン伝』にも取り入れられた。Vita *Altmanni episcopi Pataviensis*, W.Wattenbach (Hg.),

in: *MGH SS Bd.12*, S.226-243, hier 237, W.Störmer, Beobachtungen, S.463f.

- (64) 「創世記」八章四節参照。
- (65) イシドルスの『語源論』では、「歴史的洪水の後、箱舟がアルメニアのアラト山に留まったことが確認される。そこでは今日に至るまで船の木材の跡が見られるからである」と述べられてゐる。 *Isidori Etymologiarum*, S.521 (XIV, 8, 5)。
- (66) ネルマンによれば、『アノーの歌』の作者はおそらくクリミアゴート語 (Kringötsch) を考えているのであろうという。
E.Nelmann, *Das Annolied*, Kommentar, S.94.
- (67) ドイツの四民族に関する記述の中で、ザクセン人は他と比べてネガティヴに描かれている。これには同時代に起こったハインリヒ四世の下でのザクセン戦争が関係しているのかもしれない。四〇節を参照。
- (68) ザクセン人の起源説話については、すでに十世紀にコルヴァイのヴィドゥキントの『ザクセン史』第一巻二章—七章に言及が見られる。Widukindus monachus Corbeiensis, *Res gesta Saxonicae*, E.Roher / B.Scheidmüller (Hg.), Stuttgart, 1992, S.222f.
- (69) *Hieronymi Comentarium*, S.536 (Cap.8,5)。
- (70) 中高ドイツ語において *sachs* は最初短刀もしくは短剣を意味していたが、のちに長い剣を表す言葉となったという。
E.Nelmann, *Das Annolied*, Kommentar, S.95.
- (71) フランク人のトロイア起源説話については、フレデガールの『年代記』(七世紀)や『フランク人の歴史』(八世紀)などに
よりすでに古くから知られていた。またローマ人のトロイア起源の伝承はさらに古く、ウェルギリウスの『アエネーイス』(前一世紀)によって有名であった。フランク人とローマ人の親戚関係について言及した史料としては、解題に挙げたフォルクイソンの『ロブ修道院長事績録』(九八〇年頃)が最初であり、『アノーの歌』は両者の祖先を結びつけようとした二番目の証言であると言える。E.Nelmann, *Das Annolied*, Kommentar, S.95.
- (72) ホメロス『オデュッセイア』(上)、松平千秋訳、岩波文庫、一九九四年、第一一歌四〇四行以下、二九五頁以下。
- (73) ホメロス『オデュッセイア』(上)、第九歌、二一七頁以下、およびウェルギリウス『アエネーイス』岡道男、高橋宏幸訳、京都大学学術出版会、二〇〇一年、第三歌六一六—三八行、一三六頁以下を参照。
- (74) *Isidori Etymologiarum*, S.420 (XI, 3, 6)。
- (75) トロイア王プリアムスの子ヘレヌスは、トロイア陥落後にヘクトルの妻アンドロマケと結婚し、ギリシアを支配した。ウェルギリウス『アエネーイス』第三歌二九四—九七行、一一七頁。
- (76) ウェルギリウス『アエネーイス』第一歌二四二—四九行、一八頁。
- (77) ウェルギリウス『アエネーイス』第三歌三八九—九三行、一二三頁。アルバとは、ローマの母都市となったアルバ・ロンガのこと。
- (78) 小トロイアはここではクサンテンを指している。かつてローマの行政管区ゲルマニア・セクンダの第二の都市であったクサン

- テンは、古くから Colonia Traiana と呼ばれていたが、後に混同されて Colonia Traiana という名が定着するようになった。
- クサンテンがトロイア人によって建設されたという伝説は、すでにフレデガールの『年代記』にも見られる。クサンテンの歴史に関しては、I. Runde, *Xanten im frühen und hohen Mittelalter. Sagentradition—Stiftsgeschichte—Stadtwerdung*, Köln 2003.
- (79) クサンテンの名はラテン語の Ad Sanctus (聖人たちの下) に由来するが、『アノーの歌』の作者は、トロイアにはクサントゥス川があるという『アエネーイス』の記述から、架空のザンテ川を創出したと考えられる。ウエルギリウス『アエネーイス』第三歌三五〇行、一二〇頁。
- (80) この叙述は史実に基づくものではないが、ルカヌスの『内乱記』は、ラインからエルベにかけて諸民族がカエサルに追従したという噂が広まったと伝えている。Lucan, *The Civil War*, S.38 (I, 481-83).
- (81) 「ガリアとゲルマニア」は十世紀末以来、ザクセン・ザーリア朝のアルプス以北における帝国領域を示す概念として用いられていた。なお、ここで言われる「ガリア」はフランスのことではなく、ドイツのライン左岸域を指す。M. Luge, „Gallia“ und „Francia“ im Mittelalter. *Untersuchung über den Zusammenhang zwischen geographisch-historischer Terminologie und politischem Denken vom 6.-15. Jahrhundert*, Bonn 1960, S.123ff., E. Nelmann, *Das Annolied*, Kommentar, S.98f.
- (82) ローマ人の恐慌状態と彼らの都市からの逃亡に関する記述は、Lucan, *The Civil War*, S.38ff. (I, 486-522) に詳しい。
- (83) 前四八年のファルサロスの戦い。カエサルとポンペイウスの両軍がマケドニアのファルサロスで戦い、この戦いに敗れたポンペイウスはエジプトに逃れ、その地で暗殺された。『アノーの歌』におけるこの戦いの叙述は、主にルカヌス『内乱記』に基づいている。Lucan, *The Civil War*, S.398-416 (VII, 408-641), この戦いについては、カエサル『内乱記』国原吉之助訳、講談社学術文庫、一九九六年、二〇六頁以下(第三卷一〇章以下)がある。
- (84) Lucan, *The Civil War*, S.404 (VII, 475-77), S.416 (VII, 635-37).
- (85) 「敬称」は原文では *igizm (= iherzen)*、*huzzen* と言われているのは、いわゆる「君主の複数形 (Pluraris maiestatis)」であり、これは同時に共和政から帝政への移行を意味している。E. Nelmann, *Das Annolied*, Kommentar, S.100f.
- (86) これはドイツ人が帝国に組み入れられたことを意味する。なお、ここに見られる「ドイツの人々 (diutisch liuti)」(この節ではさらに別の箇所 *diutisch man* という表現も見られる) は、中世ドイツ語において *diutisc* を民族概念として用いた最初の用例である(解題註3参照)。ただし、ここでは *diutisc* はまだ形容詞のかたちをとり、名詞化されるには至っていない。H. トーマスによれば、その後一一五〇年頃になって形容詞の *diutisc* を名詞化した「ドイツ人 (*diu Diutiscen*)」という言葉が現れ始め、一三世紀半ばにこれが浸透するようになったとされる。H. トーマス『中世の「ドイツ」』、二五九頁以下参照。
- (87) 前一五年、アウグストゥス帝は、ティベリウスとドウルスを

- してヴィンデリキ族を征服した。その征服地ラエティアに軍事拠点として *Augusta Vindelicorum* が建設されたのは、ティベリウス帝治下の紀元三〇年頃と推定される。アウクスブルクの歴史に関しては、¹⁾ G. Gottlieb (Hg.), *Geschichte der Stadt Augsburg von der Römerzeit bis zur Gegenwart*, Stuttgart 1984, 瀬原義生『ヨーロッパ中世都市の起源』三六二頁以下参照。
- (88) ケルンはローマの行政区ゲルマニア・セクンダの首府であり、三世紀にはガリエヌス帝の宮廷が置かれた。また六世紀のメロヴィング時代にはアウストラシアの首府の一つとなるなど、ケルンは古くから支配の拠点であった。
- (89) ケルンの歴史はアウグストゥス帝治下の前一二年、アグリッパによって *oppidum ubiorum* が築かれた時代に遡る。その後五〇／五五年にクラウディウス帝により植民都市となったケルンは、²⁾ 同帝とその妻アグリッピナの名に因んで *Colonia Claudia Ara Agrippinensium* と名付けられた。³⁾ H. Stehämper (Hg.), *Köln in römischer Zeit. Geschichte einer Stadt im Rahmen des Imperium Romanorum*, Köln 2004, P. Fuchs (Hg.), *Chronik zur Geschichte der Stadt Köln*, Bd. 1, Köln 1992, 林毅「*Colonia Claudia Ara Agrippinensium*——ローマ都市ケルンの概観」同『ドイツ中世都市と都市法』創文社、一九八〇年、二二六―二三二頁、瀬原義生『ヨーロッパ中世都市の起源』二八六頁以下参照。
- (90) ヴォルムスはケルト人の定住地として成立し、前五〇年頃ローマ帝国に編入された。カエサルによりヴァンギオネス人がこの地に住まわされた⁴⁾ことから、この地は後に *Civitas Vangionum* と呼ばれた。シュパイヤーもとはケルト人の定住地であったが、前七〇年頃ゲルマン人のネメテス族によって占拠され、その後前五六年ローマの支配下に入り *Civitas Nemetum* と呼ばれた。ヴォルムスおよびシュパイヤーの歴史については、⁵⁾ H. Boos, *Geschichte der rheinischen Städtekultur von den Anfängen bis zur Gegenwart*, Bd. 1, Berlin 1897, W. Eger (Hg.), *Geschichte der Stadt Speyer*, Bd. 1, Stuttgart 1982, 瀬原義生『ドイツ中世都市の起源』三三四頁以下参照。
- (91) マインツの起源は前一三年アウグストゥスの義息ドゥルススによって築かれた要塞に遡り、四〇〇年頃ローマの行政区ゲルマニア・プリマの首府となつて以来、発展を遂げた。マインツの歴史に関しては、⁶⁾ F. Dumont u.a. (Hg.), *Mainz. Die Geschichte der Stadt*, Mainz 1998, 瀬原義生『ドイツ中世都市の起源』三二六頁以下参照。
- (92) 原文では *dere kuninge wichtum*. ドイツ国王の戴冠は十世紀以来アーヘンで行なわれるのが慣例であったが、おそらく『アノーの歌』の作者は、一〇七七年マインツにおける対立国王ルドルフ・フォン・ラインフェルデンの国王戴冠を念頭に置いていたものと思われる。⁷⁾ E. Nellmann, *Das Annolied*, Kommentar, S. 102, H. Thomas, *Bemerkungen*, S. 42ff.
- (93) マインツでは一〇七一年と一〇七七年に教会会議が開かれたが、ここから『アノーの歌』においてマインツが「教会会議の中心地」とされたのではないかと考えられる。⁸⁾ E. Nellmann, *Das Annolied*, Kommentar, S. 103.

- (94) 十世紀末に書かれた『リエージュ司教事績録』によれば、メッツイウスはカエサルに従士ではなく、アルバ人たちの王であったとされる。*Gesta episcoporum Leodiensium* (解題註15), S.168, D.Knab, *Das Annolied*, S.68.
- (95) ゲルマンのトレフェリ族に由来するトリリアは、アウグストゥス帝治下の前一五年に要塞が築かれて Augusta Treverorum と呼ばれるようになり、その後紀元五〇年にクラウディウス帝の下で植民都市 Colonia Augusta Treverorum となった。なお、トリリアでは十世紀末以来、ニムスの子トレベタがこの都市を築いたという伝説が形成された。I.Haai-Oberg, *Die Wirkungsgeschichte der Trierer Gründungssage vom 10. bis 15. Jahrhundert*, Bern / Berlin / Frankfurt a.M. / New York / Paris 1994. トリリアの歴史に関しては、H.Heinen, *Trier und das Treverland in römischer Zeit*, Trier 1988, H.Hubert u.a. (Hg.), *Trier im Mittelalter*, Trier 1996 を参照。
- (96) この箇所は『トリリア人の事績録』(一一〇一年頃)にも取り入れられた。*Gesta Treverorum* (解題註16), S.147, E.Nelmann, *Das Annolied*, Kommentar, S.103.
- (97) Orosius, *Historiae adversum paganos*, C.Zangemeister (Hg.), *Corpus scriptorum ecclesiasticorum latinorum* Bd.5, Wien 1882, VI, 18.20.
- (98) 「新しい王国」については、解題註30に挙げた文献を参照。
- (99) 使徒ペテロによるエウカリウス、ヴァレリウス、マテルヌスのガリア・ゲルマニアへの派遣とペテロの杖によるマテルヌスの復活の物語は、十世紀にトリリアでつくられた『聖エウカリウス、ヴァレリウス、マテルヌス』伝により、トリリアの初代司教伝説として広く知られていた。*Vita sanctorum Eucarii, Valerii, Materni*, in: *Acta sanctorum*, Jan. II, Antwerpen / Brüssel, 1634, S.918-922, W.Levison, *Die Anfänge rheinischer Bistümer in der Legende*, in: ders., *Aus rheinischer und fränkischer Frühzeit*, Düsseldorf 1948, S.7-27, E.Ewig, *Kaiserliche und apostolische Tradition in mittelalterlichen Trier*, in: ders., *Spätantikes und fränkisches Gallien*, Bd.2, München 1979, S.50-90, 67ff.
- (100) 『聖エウカリウス伝』では三人がケルンで布教を行なったことや、マテルヌスがケルン司教となったことは述べられていない。当初、マテルヌスの伝説とケルンとは無関係だったが、ケルンには四世紀にマテルヌスという同名の司教が実在し、またペテロの杖もケルンに保管されていたことから、十世紀末に伝承上のマテルヌスと実在のマテルヌスが同一視されるに至った。拙稿「ケルン初代司教伝説の展開」『比較都市史研究』第二巻第一号、二〇〇二年、一三二―一五頁参照。
- (101) 原文では *godi gude knechte*、つづに見られる記述は「キリストの兵士 (*militia Christi*)」の思想と結びついている。信仰のために戦う「キリストの兵士」という考えはパウロによって発展を遂げ(例えば「テモテへの手紙」二二章)、その後の時代に継承された。中世においては、とりわけ十字軍の時代にこの思想が強調された。J.Auer, *Art. Militia Christi*, in: *Lexikon für Theologie und Kirche*, Freiburg 1962, S.418.

(102) 十二世紀につくられた『ケルン大司教カタログ』によれば、アノーは三十三代目のケルン大司教とされる。ここではアノーについて次のように述べられている。「第三十三代の聖アノーは、ドイツ全土の花にして新しい光であり、ケルン教会の促進において過去のすべてのケルン大司教を凌駕した」。Catalogi archiepiscoporum Coloniensium, H. Cardauns (Hg.), in: MGH SS Bd.24, S.340.

(103) アノー以前に聖人となったケルン大司教は、マテルヌス、セヴェリン（四〇〇年頃）、エベリギル（六世紀）、クニベルト（七世紀）、アギロルフ（八世紀）、ブルーノ（在任九五三—六五年）、ヘリベルト（在任九九九—一〇二一年）の七人であるが、ネルマンによれば、ブルーノは当時まだ聖人として崇敬されていなかったとされる。E.Nelmann, *Das Annoied, Kommentar*, S.105.

(104) 三四節以下の叙述は、主にヘルスフェルトのランペルトの『編年誌』（一〇七八／七九年）に基づいている。かつては、ジークブルクの修道院長レギンハルトによって一〇七八年頃に書かれた『聖アノー伝』（この史料は今日現存しない）が三四—四八節の中心的な史料と考えられていたが、一九七六年に発見された二つの断片記述（一つは治癒奇蹟、もう一つはアノーの幻視と死、そして死後の奇蹟に関する記述）によって、内容的に『アノーの歌』と共通性が少ないことが判明し、今日ではこの聖人伝の『アノーの歌』への影響はそれほど大きくないと考えられている。解題の註に挙げた諸論文の他、E.Nelmann, *Das*

Annoied, Nachwort, S.192を参照。一方、一一〇五年頃につくられた第二の『聖アノー伝』はランペルトの叙述の影響を強く受けており、『アノーの歌』との共通性が多く見られる。これについては解題註に挙げたM・レーディガーの序文S.106-110を参照。なお、以下の註において『聖アノー伝』という時は、この新しい方の聖人伝のことを指す。

(105) 訳文では「司教に任じ」としたが、原文には「司教に」という言葉はない。アノーがハインリヒ三世によって大司教に叙任されたのは、一〇五六年二月のことである。

(106) ネルマンは神と人との中間に立つアノーを両者の仲介者として捉え、「第三の世界」の思想と結びつけて考える。E.Nelmann, *Die Reichsidee*, S.69f.

(107) 原文は rich (=Reich). ネルマンによれば、中高ドイツ語において rich は「帝国」を表すとともに、人的結合体としての国家を体現する「帝国諸侯」をも意味していたとされる。E.Nelmann, *Die Reichsidee*, S.60, ders., *Das Annoied, Kommentar*, S.108. 参照。

(108) 諸教会における夜の祈祷については、Lamperit *Annales* (解題註 10), S.243, *Vita Annonis archiepiscopi Coloniensis*, R.Koepeke (Hg.), in: MGH SS Bd.11, Hannover 1854, S.470 (I, 5) にも言及が見られる。

(109) 原文では oblei. これはラテン語の oblagia に対応する言葉で、教会に納付される金銭や貢租物を意味するが、文脈上アノーはこれらのものを貧しき人々に施すために所持していたと解釈で

きよ。E.Nellmann, *Das Annolied*, Kommentar, S.109.

- (110) *Vita Annonis*, S.470 (I, 8) 参照。

- (111) アノーは一〇六二年から六四年まで摂政として帝国政治の指導的地位にあった。また彼はハインリヒ四世の養育者として一〇六五年まで幼き国王を教育した。 *Vita Annonis*, S.496f. (I, 7) 参照。

- (112) 『聖アノー伝』では、イングランド、デンマーク、ギリシアの国王から贈物があつたとされ、またポーランド王妃からザールフェルトの所領を寄進されたという。 *Vita Annonis*, S.478f. (I, 30) 参照。

- (113) 聖ゲレオン、聖クニベルト、聖マルティン（大）教会のことを指している。

- (114) ケルン市内の聖マリア (St. Maria ad Gradus) 、聖ゲオルク、ヴェストファーレンのグラーフシャフト、およびテューリンゲンのザールフェルトの四つの修道院のこと。 *Lamberti Annales*, S.244, *Vita Annonis*, S.474-478 (I, 15-28) 参照。

- (115) ジークブルクにおけるアノーの墓については、 *Lamberti Annales*, S.250, *Vita Annonis*, S.503ff. (III, 6) 参照。

- (116) 神によるアノーの試練については、 *Lamberti Annales*, S.247, *Vita Annonis*, S.492 (II, 20) 参照。

- (117) ここではライン宮中伯ハインリヒとの領域支配をめぐる争いを指している。ハインリヒはアノーに対して軍事行動をとったが、戦闘に敗れ、軍事的拠点であつたジークブルクを割譲せざるをえなかった。 G.Jenal, *Erzbischof Anno II* (解題註5), Bd.1,

S.110-114.なお、宮中伯との対立については『聖アノー伝』に述べられている。 *Vita Annonis*, S.475 (I, 19), S.480f. (I, 33).

- (118) 一〇七四年のケルン市民の反乱とアノーの追放については、 *Lamberti Annales*, S.185ff, *Vita Annonis*, S.492ff (II, 21) および解題註6の文献を参照。

- (119) 「サムエル記下」一五章一一一六節。

- (120) 一〇七三―七五年のザクセン戦争がこの叙述の背景をなしていると考えられる。また、ここに記されている戦闘の領域は、ザクセン・ザーリア朝の帝国 (*Imperium Romanorum*) を表している。なお、この四〇節の叙述は、レギンハルトの『聖アノー伝』のザクセン戦争に関する記述に基づいていると考えられ、さらにこのレギンハルトの記述は新しい『聖アノー伝』の叙述にも受け継がれた。そこでは次のように述べられている。「多くの悲しみや苦難に加えて、新たな混乱の不幸が今や王国の四方に広がり始め、事態は全教会の危機に直面するまでに深刻化した。フランク人とザクセン人は狂暴な野蛮さでもって戦い合い、シュヴァーベン人とバイエルン人は確かな信念もなくある時はフランク人、ある時はザクセン人に加担した。かくてドイツの王国全土で殺害、放火、略奪が横行した。(中略) この苦しみに苛まれ心を痛めたアノーは、もはや生きること嫌気がさした」 (*Vita Annonis*, S.495 (II, 23))。ここでは『アノーの歌』とは異なり、ドイツ王国が対象とされている。E.Nellmann, *Das Annolied*, Kommentar, S.113f. 参照。

- (121) この啓示については、 *Vita Annonis*, S.496 (II, 24) 参照。

- (122) ランペルトの『編年誌』にも『聖アノー伝』にも同様の記述は見られない。
- (123) この夢については、*Lamberti Annales*, S.248f., *Vita Annonis*, S.497 (II, 25) および戸沢明「聖アノーの夢——アノーの歌」とラムペルトの『年代記』『昭和大学教養部紀要』第二二巻、一九八一年、一九—二七頁参照。
- (124) マイニンツ大司教バルドー（在任一〇三一—五一年）。バルドーに関する文献としては、F.Winkler (Hg.), *Der heilige Bardo. Erzbischof von Mainz und Erzkunzler des Reiches 1031-1051. Zur Feier des 900. Todestages des Heiligen*, Oppershofen / Wetterau 1951 がある。
- (125) ケルン大司教ヘリベルト（在任九九九—一〇二一年）。ヘリベルトに関しては、H.Müller, Heribert, Kanzler Otto III und Erzbischof von Köln, Köln 1977 を参照。
- (126) 「ペトロの手紙」二「三章一四節参照。この染みは、一〇七四年にケルンを追放されたアノーが大軍を率いて都市の反乱を鎮圧し、都市を荒廃させたことを指す。これについては、*Lamberti Annales*, S.192f. 参照。
- (127) ヴォルムス司教アルノルト（在任一〇四四—六五年）。ランペルトは彼を聖なる人物と称してこゝ。 *Lamberti Annales*, S.100.
- (128) *Lamberti Annales*, S.250, *Vita Annonis*, S.497 (II, 25)
- (129) 「ヨブ記」二章七節。
- (130) アノーの死については、*Lamberti Annales*, S.248, *Vita Annonis*, S.501ff. (III, 9-15) 参照。
- (131) 「申命記」三三章一節参照。
- (132) *Lamberti Annales*, S.242, *Vita Annonis*, S.508f. (III, 17ff.) 参照。
- (133) アルノルトは『聖アノー伝』においてフォークト (advocatus) と記される。 *Vita Annonis*, S.510.
- (134) 『聖アノー伝』では、フォルプレヒトの負債の罪が非難されている。 *Vita Annonis*, S.510.
- (135) 以上のフォルプレヒトの罪と奇蹟の物語は、『聖アノー伝』の奇蹟の中で中心的な位置を占めている。 *Vita Annonis*, S.510-512 (III, 24).
- (136) 「出エジプト記」一四章参照。
- (137) 「出エジプト記」三章八節、三三章三節。
- (138) これらの奇蹟については、「出エジプト記」一五章二五節、一六章、一七章五節、および「申命記」三三章一三節を参照。
- (139) 「民数記」一二章参照。

〔きたじま ひろゆき／中央大学文学部非常勤講師〕